新女界

主幹 海老名彈正
主筆 安井哲子

要目

瑞西國リギ登山記 海老名彈正
●思想
アルプス登山の追懷 安井哲子
海の光 理學士 谷津直秀
天照大神と日本婦人 赤星仙太
海より 大塚楠男
日本に於ける夏の經驗 コーツ夫人
老廢兵 くすを
ブース夫人傳を讀む 薔薇園主人
和歌
●講壇
自然の兒 海老名彈正
●雜錄
金錢と子供 某夫人
女學生の誘惑 一記者
彙報

八月號

第壹卷第五號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

無菌
牛乳
山羊乳
神田三崎町
愛光舎
電話本局一三〇三番

千代田香油
香油 大瓶 卅九錢 中瓶 廿五錢 小瓶 十七錢
白粉 大瓶 卅五錢 中瓶 二十錢 水製 廿五錢
千代田香油と白粉とは廿世紀式の新香料を配合して調製せるものなれば、夙に淑女令嬢間に愛用せられ高評盛なり
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

新女界第一巻第五號目次

●瑞西國ギリ登山記　海老名彈正

●思　想

●アルプス登山の追懐　安井哲子
●海の光　理科大學講師 理學士 谷津直秀
●天照大神と日本婦人　赤星仙太
●海より　大塚楠男
●日本に於ける夏の經驗　コーツ夫人
●老廢兵　くすを
●ブース夫人傳を讀む　薔薇樓主人
●和歌　松川信男
●霹靂　佐藤茂

●講　壇

●自然の光　海老名彈正

●雜　錄

●金錢と子供　某夫人
●女學生の誘惑　一記者
●編輯だより

新女界夏期號（前號）目次

●目　次

●口繪（河畔の朝）　アレキサンドルラペン筆
●最も樂しき夏期の休業　安井哲子

●思　想

●現代の婦人問題　法學博士 浮田和民
●夏期休業と女學生　女子大學々監 麻布正藏
●うるさい子供　文學士 倉橋惣三
●星（小説）　藤なみ子
●詩二篇　澱橋
●如何なる童話が最も歡迎せらるゝか　石野爲之助
●伯父さん（小説）　平山訓子

●講　壇

●良心の覺醒　海老名彈正
●綠陰淸話　同　上

●雜　錄

●今年の夏　海老名みや子／元良よね子
●海水浴に就て　醫學士 金子魁一
●病友に與ふる書　小日向生
●彙報○編輯だより

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新人第十卷第八號目次

●社説

●酒匂常明の處決

●教壇

●不朽の信　海老名彈正

●想苑

●進化過程の空隙　中村長之助

●エヴァン・ロバーツと語る　在英　内ケ崎作三郎

●野毛坂の奇人　不喚樓主人

●土曜放言錄　秋　郎

●天橋のあかつき　渡瀬南陽

●内田の死　佐藤瀫橋

●露國の宗敎　櫻井鷗村

●淸國の夏　吉野作造

●實業界の實驗は余に如何なる敎訓を與へしか　蘇翁

●自殺論　加藤直士

●三好の手紙　竹友藻風

●雁山集　不喚樓主人

●聖書研究

●詩第四十二三篇　海老名彈正

●獨逸神學略史を讀む　同

●東都講壇

●カルビン紀念會（井深博士、鵜澤博士）

●時評

●現代の青年學生に望む●希臘正敎會の獨立問題●編輯餘言●彙報

ライオン歯磨

●慈善券●

第八回決算に付愛用諸君に謹告

一金壹萬七千百七十參圓卅七錢六厘

但自明治四十一年一月至同年十二月滿一ケ年間ライオン歯磨

小袋一千七百十七萬三千三百七十六袋賣捌に付此慈善劵總金額

内金九千〇貳拾五圓參拾貳錢

但同上年間ライオン歯磨慈善劵付空袋九百二萬五千三百廿袋引換金額

差引々換殘額　金八千百四拾八圓〇五錢六厘

弊店發賣ライオン歯磨が現代理想的の製品として一般御需用者の嗜好に適し其製販額の益々饒多を來たすと共に小袋入添附の慈善劵より生ずる金額も亦豫想外の好成績に進み現に昨年度の如きは之を前年に比して優に二千餘圓の増加を見るに至りたるは全く愛用諸彦御同情の厚きに基因するものにして弊店の光榮として深く感謝する所也　然れ共猶遺憾に堪へざるは發行したる慈善劵の金額と引換金額と相去る甚だ遠き一事にして其引換未了に屬するもの即ち前掲の如し、由來弊店の素志たる縦ひ零砕の金額なればとて積れば無慮千萬の巨額に達し而も鰥寡孤獨が當然受くべき福源となるものなるが故に一箇の慈善劵たり共無益に放棄し他の廢物と同一視せざらん事を請ふにあり、されば弊店は當初の希望に從ひ各位が惻隱の御同情を仰がんが爲め〃未了引換期限を來る八月十五日迄延長し以て出來得る限りの好果を收めんとす、因て四十一年十二月限りの慈善劵附の袋御所持の諸彦は同日迄に本支店に就て引換の劵を執られん事を請ひ、總斯くても引換の完了に至らずして自然廢棄に歸すべき分の金額は如何に處理すべきか、這は愛用諸彦の御高見に隨ひ適當なる事業に貢献せんとす希くば此方法に付きても十分に注意を拂はれ八月十五日を期して東京本店宛續々御高教を埀れ給はん事を弊店は之に依り第八回の決算を了し以て其明細を報告し各位御愛顧の萬一に酬ひんと欲す

追て其方法及金額等は確定次第發表致すべし

明治四十二年八月

東京市神田區柳原川岸

ライオン歯磨發賣元　小林富次郎敬白

支舗　大阪市東區博勞町

清國所在地　天津、漢口

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

京都御染物

本檳榔子黑
江戸褄模樣類
新柄小紋色々

東京小石川上富坂二一三
コーツ邸內

京屋　佐藤松治郎

御一報次第直ちに參上可仕候

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

營業項目

●諸會社定欵、簿記用箋類

●名刺、廣告、引札類

●寫眞版、木版、電氣版類

●醫家病院用印刷物 及附屬品

●此他如何なる緻密の物にても迅速且鮮明に印刷仕候

●地方及び諸教會よりの注文は特別御便宜に取扱可申候

東京市本郷區弓町一ノ一

忠文堂印刷所

社告

謹啓當事務所先般來小石川區小日向臺町三丁目九十三番地に移轉致候間自今『新人』並に『新女界』に關する件は同所宛に御通信奉願候

東京市小石川區小日向臺町三丁目九十三番地

新人社事務所

（振替貯金口座東京一四〇〇五）

東京婦人會附屬同志看病婦會廣告

弊會先般左記の處に移轉致し從來の通り基督教主義に基き、内は會員の修養一致を圖り、外は患家の依頼に應じて懇切叮嚀其職に從はしめ、事業漸次發展致候儀感謝の至りに候今後も派出看護御希望の御方は何卒弊會へ御申遣はし被下度懇望之至りに御座候謹言

八月

東京小石川區小向臺町三丁目九十二番地

東京婦人會附屬同志看病婦會

電話番町一四八一

基督教主義を奉じ看護婦免狀を有せらるゝ方にて入會を望まるゝ方は會長長尾糸子宛御申込みありたし

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

瑞西國リギ登山記

海老名彈正

回顧すれば我がいそがしくスウキス國を通過してより、こゝに殆んど一年の日月が立つた。今日このごろの暑さに堪へかねて、スウキスの山水がなつかしくてたまらぬ。最もなつかしきリギ山登りは去年九月十九日のことに記憶する、恰もこのときツーリツヒ市ステーション前のナショナル旅館に宿つて居つた。こゝよりリギ山の麓アート、ゴルダウまでは急行列車で走れば一時間と十分を要する。早く起き、出發の準備をした。時にツーリツヒ市は丸で濃霧に包まれて、咫尺を辨せぬといふ有樣、雨となるらんか、晴ならんか、氣遣でたまらぬ、旅館の事務員に尋ね、又給事長に尋ねて見れば、今日は必ず好天氣ならんといふので、力はついたものゝ、そろゝゝ小雨が降り出したのには閉口した。しかし雨天とならば途中から歸るのみ、幸にして晴れたらば實に千載一遇と、思切つて回行切符をかつた。普通の旅人は中々儉約する、大抵は三等列車でこらへるから、我もしかせようと思ふたが、過つて

二等切符賣口に行つたので、思ひ切つておごつたのである。午前九時二十分に乘車した。ところが途中で線路が二筋に分かれ、一はゴルダウ、一はルーセルン、前者を取れば、登山は午前となり、後者を取れば午後となる、さア迷ひ始めた、土地の案内がすぐ分らないから、濃霧の消ゆる時刻が豫め知れない。滊車は我が思ひ煩ひに同情もなく遠慮もせずにさつさとツーリツヒ湖のほとりを走る。濃霧に包まれて何も見えぬ。アルコレと決し兼ねて居るうち、滊車はツヒに來つた、無鐵砲であつたが、思ひ切つてゴルダウと定めて、乘替へなかつた。時々薄き霧の中かすかに見すかさるゝ二三の農家や悠々たる牛馬、巍然たる會堂や、なつかしき湖水さながら活動寫眞の如き心地して眼底に映じ去る。

十時十五分といふに列車はゴルダウに達す。霧は多少薄くはなつたが、四五十間さきはよく見えぬ。ここにてリギ山登りの列車に乘り替へる。同行者は三十人もあつたろう。冷氣遽に催し來るとは、兼て聞き及んだが、列車の未だ發せざるに、早や人々は外套をき、上に毛布を纏ひ始めた。此日我は望遠鏡を左肩にかけ、外套を左脇にはさみ、傘を杖の代用として右手に携へて居た。我もそろ〳〵外套をき始めたが、シヤツ一枚餘計重ねておかなかつたのは遺憾千萬、何んだか風邪に襲はれそうな心地かする。列車は十時半登山し始めたが旅客とはあべこべ山々は忽ちにして濃霧の衣を脫いて、薄雲のそれと取り替ゆる、又忽ちにして薄衣をも脫ぎ去つて裸體を示すものもある。山々は巖々たる奇峯ばかりで、鎗の如く尖りたるもあらはれ、絕壁の如く聳えたるも顯はれ、塔の如く莊嚴なるもあらはれ、棧橋の如く衝き出たるも顯はれ、熊の爪の如きがあり、象の牙の如きがあり、雲の往來速かにして、出沒隱見極りがない。しかも又大小の瀧あつて、千尋の溪の白布幾筋も懸かるやうに見ゆ、幟の如きものあり、雪の間に村消えたるが如きもあり、高く列車の上に見ゆるものあり、又途が谷底に棚くもある、千狀萬態にして名狀されないしかして又アルプスの高き嶺は幾嶺となく連り重り、白雪を戴いて大空に輝き始めた。十二時と思ふ頃列車はリギ山頂のステーションに達す。リギ山は六千尺ばかりで、餘り高い山ではない、しかも眺望は三百哩四方に及ぶ。我は下車して更に千歩ばかりも登る、見渡す限り濃霧に閉ざされ、高き連山はそこかしこ雲霧の波に漂うて居る。東方に白雪を戴いて日光に輝く巍峨たる連山、遠きはベルニース、アルペンであつて、近きは小ミテン、大ミテンである。雲霧の寄せ止る形勢は凡ての山嶽を洗ひ去らんとするやうに見ゆる。我は曾て曉天京都比叡山に登つて、濃霧が野に平安城を閉ざし葬つたるを見たとがあるが、リギ山下の濃霧は全く之に反し、千波萬

波を揚げ、潮流の如くして來る、高嶺大嶽をも洗ひ去らんとする形勢、莊美とは此の如きをいふのであろうか、しかも濃霧は何時とはなしに、通り去りたれば、此處に一湖彼處に一湖、その姿を現し、ツヒ湖、ルーセルン湖、ツーリッヒ湖、その他四五の湖水眼下にあらはれ來つて、明鏡を敷いたやうである。湖上の船は白帆を揚ぐるあり、黑煙を棚かするあり、人家亦點々として數ふべく、こゝにも村落、かしこにも村落、日光に輝く白堊作りの家々の間巍然たる敎會堂のスパーヤは更に此光景に異彩を放ちて、覺ねず人をしてそゞろに仙境に居るの感を深からしむる。我はこのリギ山の觀望に心醉して、中食はポケットより取り出したるパンの一切にてすまし、山頭に聳ゆる莊麗なる旅館に入るを肯じなかつた。

我はこゝに無限の名殘を惜みて、二時十五分ウヰッツナー行の列車に乘じて下る。そのルーセルン湖を瞰下して走り下る恰も急轉直下の感がした。途中の停車場にて梨子賣の娘が我が側に居たのに氣付き、直に半フランを與へて一個を取つたが、間もなくツリ錢を持つて來た。流石に正直なるスウヰス娘と思つた、空腹ではあつたし、此梨子の味は娘とゝもに忘れられない。久からずしてウヰッツナーに到る、こゝで渡航船を待つ、船は淸く靜なる水面を快よげに破つて來た。我々同行者數十人之に乘る。湖上より見上ぐれば我々が走り下つて來た山路は恰も大なる城壁の如くにしていかめしく、その巖々たる山は、石垣を築き上げたる大坂城を幾哩となく。續け樣に並べたるものゝやうに見ゆる。湖面は水ゆたかにして、溢るゝばかり、山と水と接する所こゝに一小村あれば、彼處にまた一村あり、皆々淸雅にして毫も貧苦の狀を見せぬ。磨き上げたる莊麗なるホテルは高きあり低きあり、或は山腹に聳ね或は湖邊にのぞみ、淸き水は溢れ湛へて巖石を洗ひ樹根を濕ほす、芝原には山羊躍り、牝牛橫はり、小供は無心にしてその間にたはふれ遊ぶ、ヌウヰスは眞に天然の大公園であるかな。誠に會堂のドームやスパーヤが山腹樹林の間に巍然たる亦一入の風光を添ふる、鳴る鐘の響も淸らかに湖面を渡り、山々相應へ、谷々相戒む、亦是れ世界の仙境である。船は處々の港々に寄つて、遂にルーセルンに達す。こゝは見るべきもの多けれども、心いそがしてステーションに到り、四時十五分發列車に乘じ、再び山に入り谷に下り右方にツヒ湖を遠見しツーリヒに歸りたるは午後五時四十五分であつた。此日も亦獨り旅行ではあつたが、寧ろ骨身にしむ感想も多かつた。嗚呼人もよく山もよく、水もよく家畜もよきスウヰスの天地よ、長く我が腦裏にとゞまつて無限の慰籍となれ。噫、スウヰスに劣らぬ山紫水明の日本、天然勝て人劣るの感がする、亦是れ千載の遺恨、之を救ふは果して誰の責任である乎。

思想

アルプス登山の追懐

安井哲

一 スヰッツルランドの仙境

想ひ出せば今から凡十年前、英國留學中の或夏、校長の勸めで、同氏管督の下に、數名の朋友とスヰツランドの片田舍に避暑した事が御座います。場處はサース、グルンドとて最邊鄙な村、其當時は宿屋一つに敎會堂が其地に於ける主なる建物で御座いました。白雪を戴いたアルプスの山脈を眼前に眺め、淸き谷川の流れを幽かに聞く外には、耳目に觸れる者は何もないと申しても可い程世離れた土地であります。そして、此唯一の宿屋には、殆全く英國人のみが家族的に宿泊して、殆毎日の樣に山狩りを致します彼人馬雜沓を極めたロンドンやパリに住居して居た人々には全くの別世界、實に一の仙境で御座います。

二 登山の快樂

此仙境に四週間許滯在中、種々の面白い經驗を致しましたが、今其中で私の一生には再あるまいと思はれる危險な經驗を致しましたから其御話を致しませう。

或朝の事で御座いました。明日は山登りをするから午前三時に起きよとの命令で御座いました。そこで其夕は十分に登山の準備をして、早くから寢室に入りました。翌朝三時になると當番の男が戸を敲いて起しに參りました。眠い眼をこすりながら起きて顏を洗ひ、手早く衣服を着換へて食堂に行つて見ますと、朝飯は勿論、辨當の用意も出來て居ました。常に登山の客を相手にする故とは申しながら、何から何まで實に能く行屆いて居るには感心致しました。やがて食事も終り全く用意も出來ますと、豫て雇つて置いた二人の案内者が丁度宿に參りました。

三 夜明の絶景

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

主なる案内者は非常に體格の良い大きな男で、其補助者たる他の一人は小柄な男でありました。彼等は我々三人の「ショール」や合羽や飲食物などを脊負ひ、薄暗い角燈で田舍路を照し乍ら吾々三人の前後を保護しつゝ進んで行きました。私共は未だ十分眠りよりさめず、殊に外は暗黑で何となく物凄い有樣で御座いましたから、誰も物言ふ者もなく、冷やかな空氣に顏をうたせながら、先導者の照す薄暗い光を目當に、前の人に從つて機械的に歩を運んで居ました。次第に畠や牧場を過ぎて、やがてそろ〳〵山路に入り込みかゝる頃、遙に東方の山脈を見渡しますとどうでせう、何ともいへぬ麗しい桃色の一點が積雪の山頂に現はれ初めました。愈夜明も近いなと思ふ間もなく、其桃色は次第に、峯から峯にと廣がつて行く美くしさ、何と形容して可いか、何と賞讃して可いか唯「嗚呼奇麗だ」と云つたのみで、一同無言で白と桃色とを染別けたアルプス山脈を暫時見つめて居ました。

四 變化多き登山の途中

やがて夜も明けて來ましたので、次第々々に山を登り初めました。變化多き麓の樂しさ、美くしき草もあれば木もあり、鳥も唱へば羊も遊ぶ、此天然の美、神聖なる氣に觸れては、誰でも其身の餘りに小なるに驚かずには居られません。やがて汗水流して岩を登れば、圖らずも清き泉を見出して大喜ひ、側に腰を下して冷水に喉を潤す時の樂しさは實に何とも申せません。益登つて行きますと我目を信じ得ぬ程の積雪、辷らぬ樣にと注意して靜に進んで行きますと再岩山の下に出ました。

五 晝食

此處から頂上までは餘り遠くも御座いませんから、此邊で晝食しやうと、一同岩陰に坐を占めて、案内者の脊負つて居る辨當を取出し、冷肉や鷄卵や果物の御馳走、半日歩き續けて空腹になつた者には云ふに云はれぬ珍味であります。併山頂まで達せぬ前に餘り長く休む

事は出來ぬと促されて、疲れた足を再引ずつて歩き初めました、此度の路は今迄と違ひ、險阻な岩山、而も岩と岩との間には片足付陷りそうな大きな間隙がありますので、其恐ろしさは何とも申せません。若足をふみ外づして此處から落ちたならばと、不必要な想像を致しますと、それが現實となつて足を故さらに蹈み入れそうになります。併幸に何の危險もなくそれを通り過ぎますと、其次こそは眞の危險に出逢ひました。

六　降り出す小雨

やうやう無事に其岩山を渡り越したかと思へば、あやにく空が曇つて來て、雨がぽつ／＼と降り初めました。眼前に切つ立つて居る非常に高い岩は登れば直に頂上といふのに、何たる不運の事であらう、かゝる險しい岩が濕つて居ては登るには實に危險であるとて、校長と案内者とは暫時相談の樣子で御座いましたが、到底登つて來た路に引返へす事は出來ず、頂上から降る路は容易く且近い故にどうしても之れを登らねばならぬといふ事に決しました。

校長は自分が責任を以て私共を連れて來て、萬一危險の事があつては申し譯なしと、心には非常に心配して居られたそうで御座いますが、主なる案内者は曾て同氏を數回案内して

登山せしめた最誠實で親切な熟練者、此人が保證する事であるから、まさか生命に危險はなからうと信じたので（之れは後に聞きたる話）故さらに平氣で、これから此峭壁を登るから十分に注意する樣にと云はれました。私は未だ曾て危險な登山をした經驗が御座いませんから、唯先輩經驗家の計畫にのみ從つて居ましたが、他の一人は曾て登山の經驗もある人故、危險であらうとて登る事を拒みました、併案内者が安全を保證して强て登る事を勸め、若徒に此處に時を費して居るならば雨は益降り、危險は益加はるのみか、日でも暮れる時には如何とも仕方がないからと申しました。

七　綱にて絶壁を引き上げらる

そこで愈登ると決しましたが、到底攀ぢ登る事が出來ませんから、一人々々綱で引上げる事とし、先主なる案内者が荷物を脊負ひ、厚い服を着けたまゝで、綱を手にして宛も猿の樣に、見る間に遙絶壁を攀ぢ上り終に姿が見ゑなくなりました。副の案内者は後に殘つて、吾々の中一番體重の少い者から先に引上げらるゝ事にするといふので、私が其撰に當りました。そこで綱を腰に縛ひ愈相圖で遙に高く引き上げらるゝ事となりました。其時の私の感想、若綱が斷れた時には此身がどうなるであらうか、之れは實に危險な事である、若此處

で死んだならば留學生の身、政府に對して申譯がないと考へた時には一種異樣の感が起りました。

校長は私よりも一層其責任に對して心配でありましたでせう。併非常に沈着に且快活に少しも危險はありません。彼案内者が保證して居ますから大丈夫です。能く彼に信賴し成るべく足場を見出して、あせらずに引上げられなさい。」と勵して下さいました。ところが愈登る事になりますと中々足の先を休める樣な都合の良い場所が見當らず、時々空中に吊し上げられますので其苦しさ譬へ樣がありません。二三度は呼吸が止るかと思ふばかりでしたが、一生懸命に綱につかまれば猶更自分の體重で其綱を引締めて苦しさを増して來ます。そして校長が絶えず「大丈夫、大丈夫」と勵ます聲が下に聞えます。

八　刹那の悟

此苦しい最中に、不圖心に浮んだ事は「あせると却つて危險である、自分の力を用ふるのは得策でない」といふ事でありました。そしてそれから自身を全く案内者に任せて、其爲すがまゝに從ひました。實に此一刹那、私は其身の輕さを覺え、何の心配も苦痛もなく、容易く案内者の居る場所まで引上げられました。思はず見上げますと、案内者の面相、其眞面目な其嚴格な、其熱心な顏付には實に驚かざるを得ませんでした。そうでせう。他人の生命を支ふるといふ此重大な責任を有する場合に、かゝる面相は實に其心の狀態を表はした者であります。

九　身動きもならぬ場處に友を待つ

やう／＼危險を犯して無事に登つて來ますと、彼は直に綱を解いて、私を側の狹い岩の上に立たせました。其足場の狹さ、やう／＼兩足を置き得るだけでした。其處に絶壁を脊にして友の來るを待つ心細さ、到底實驗せぬ者には想像がつきません。然るに此案内者は私に危險なかれかしと祈る熱心から何とか、警戒を與へ樣と思つても、英語を充分に知らぬので、暫く默考して居ましたが、あゝ今でも、忘れません。嚴かに左の食指を擧げて、'Very stop,'(十分に止れの意ならん)と沈痛な聲で申しました。'Very stop,' とは 'Dont move,'(動いてはいけません)の意味でありませうけれども、stop の意味を強める爲に、Very を用ひたのだと考へると、何となくをかしくなつて來て、密に微笑を漏しましたが、其眞面目な顏と、嚴かな申渡しに、滑稽な感を無理に抑へて靜に立ち止つて居ました。

九　朋友の到著と下山

間もなく校長が登つて來られたので、終に二人とも一段高い安全な岩の上に移る事を許され、第三の友を待つて居ました。此友は非常に身體が肥滿して居る爲めに、引上げられるのに最困難を感じたと見ゑまして、如何に上から勇氣づけても「私はもう死にそうです、死にます」の叫び續けでありました。併幸何の變りもなく漸く登つて來ました。

それから直に絶頂に達しましたが、雨は尙降り續くので、直に下山致しました。私は此時不思議に頭腦の明瞭と、精神の快活とを覺ゑまして、身輕るに勢よく歸途に就きましたが年老いた校長もさすがに疲れた樣ではありましたが、それにも係らず、元氣が中々盛んでありました。第三の友人のみは案内者に助けられてやう〳〵宿に歸りました。

十　登山に依つて得る敎訓

此登山で私は三つの事を學びました。即第一は遙に眺めて美くしく見ゆる山も、之れに登るには非常に困難な事、そして此困難は遙絶頂に達する事のみを考へて居る時には、堪へ難い樣に感じますが、其途中に見る景色や植物や積雪や岩石や、總て出逢ふ物に興味を抱く時には、目前の快樂に慰められて、何時の間にか絶頂に登る事が出來ます。第二は一度登りかけたならば、いくら途中で厭になつても後戻りは出來ません事、即兎も角も絶頂まで行かねば下山の出來ぬ事。第三には自分の生命を保護して居る案内者に絶對的信賴して居る時には、非常に危險に見ゑる路でも、意外に容易く通過の出來る者であるといふ事であります。此登山後私は學問する場合でも、世に處する場合でも、一種の信仰と勇氣と平和とを持つ樣になりました。實に私共の未來に於ける運命は、眼前に現れて居る山頂の樣に明に見る事は出來ません。併其處に達する途中には苦痛もあれば快樂もあり、喜びもあれば悲しみもあつて、宛も登山の途中に實驗した興味ある變化の樣であります。之れを樂しみつゝ、運命の指定者たり、人生の案内者たる方に絶對的服從してまゐります時には、絶體絶命と想像した危急の場合にも、一種の強い力を感じて、容易く之れを通過する事が出來、云ふべからざる愉快を感ずる者であります。私は充分の準備と、信賴すべき案内者とを備へた登山は、身體上知識上の利益は勿論、精神の修養に非常なる勢力を有する者であるといふ事を深く信ずる者であります。

海の光

谷津直秀

月のない夏の夜、大空には數かぎりもない星がきら〳〵として、銀河の白く横はつている時、ボートに乗つて鏡の樣な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

海の面を漕ぎまわると、擽のあたる所が數千の螢の飛びちがう樣に實に筆紙も及ばない程麗はしく海の光を發することがあります。又時とすると海の深い所でぼうと青い光が見ゐる事もあり、又濱邊などで波浪が押し寄せてくだける時にも見ゐることがあります。

あれは何が光るのか

ときくと漁士は「なァに之は潮が光るんだ」と答へる、幾分か考へのある人は燐でも光るのであらうと云ふ、或は少し大袈裟に光ると、恨を呑んで沈んだ古の武士の靈魂か漂つて居るのだらうなど色々に説明をする。西洋でも古は海から燃へる瓦斯が立ち上るのであらうと考へた人もあるし、又は偉い哲學者でも風と波との摩擦で電氣が起つて其れか光るのであらうと考へて居つた。ベンジヤミン、フランクリンも始は電氣であらうと思つて居つたが、さすが實驗的の精神に富んだ人だけあつて、掻き廻はすと光る海水を布で濾して見た所、濾せて出た水はいくら掻き廻しても光らないで、布か返つて光る事を見てどうしても布に附着して居るものが光の原因であると結論しました。其が初りで生物學者や物理學者などが研究をして、今では慥に海の水が光るのではなくつて、水の中に生きて居る動物や植物が光ると云ふ事がわかりました。

第一に云はなければならないのは、海の中で光るものは目に見ゐない樣な小さなものはない(バクテリヤで光るのがあるサンマや又他の魚が光るのは此バクテリヤが光るのですが海の中では光らない)其故光る海水をコツプに入てランプに近くよせて見ると色々な蟲が見へます。其跳ね游ぐさまはまづ廻り燈籠の樣なもので、形狀の怪異珍妙なことは百鬼夜行の繪卷物にでも有りさうなものがあります。又優美奇麗な姿で極樂鳥も三舍を避ける樣なものも居ます。勿論其等が何れも光を放つと云ふ譯ではない、少し注意してランプを遠けて硝子の棒で觸つて見ればどれが光るか光らないかゞ容易にわかります。

こう云ふ動物を特に澤山見るには、寒冷紗で直徑一尺位深さ一尺五寸位の網を造つて、靜に海面を曳き廻り(手にてもつか或は船ばたにつけて)二十分位の後で少し水を入れてあるバケツの中にて反轉して洗ひ、又海の上を曳き廻うして數回洗うとバケツの中の水には動物の數が段々增して其光りは段々と強くなりますこを云ふ風に採集するをウワビキと云ひとれたものをトー(Tow)むづかしく云へはプランクトン(Plankton)と云ふのです。

光る動物の中で主なものはヤコーチユー(夜光蟲)で極小さい透明な一の細胞であります溫い海には無數に居つて時と

すると海水が此蟲の爲めにどろ〳〵して少し桃色になつてトマトースープの様になる事さへあります。其次に光る動物で又ウミホタルと云ふエビで小い二枚の殻に入つているものがある。ヤコーチユーは體が光るが之は口邊から光る液を吐いて實に美事なものであります。此蟲をとるには夜死んだ魚(頭ばかりでもよし)に糸をつけて濱邊か岩の間などに結びつけて置いて、一二時間の後で引き上げると無數のウミホタルが狼狽して大雜沓を極め、かけ廻るあり落つるものもあり、全面光となつて美麗なる事たとへるに物のない程であります。其外エビの類で光るのがある大なものではクラゲの類又ホヤの類ではサルパ、ピロソマなど呼ばれるものが光る。イカの類ではホタルイカ(鑵詰して近時發賣して居る)がある。其から魚には黑い小いサメでカラスサメと云ふのが光る。又眞鶴小田原邊で多くとれるハダカイワシは盛に光る。深い海は晝夜の區別なく暗黑世界でそこには様々な魚が多く居つて提灯の様な發光器を有つてゐるのがある。其から游いでいるものばかりでなく、底にゐる動物で光るのが少なくないウミシヤボテン、ウミエラと云ふサンゴの様な動物ゴカイの類ののキボシムシ、イシワリガイ、クモヒトデなどにも光るのがある。

何の爲めに光るか

と云ふに(一)敵ををどかすのが隨分あるらしい丁度自動車などが夜二つ目の様に强い光のランプをつけてくると吾々でも一寸心持が宜くないと云ふ様なものである(二)其から漁士が篝火をたいて魚を集める様に動物が光をだして食物を集める事をする又(三)ウミホタルの類では光の雲を吐いて急に逃げて敵から自分の所在をくらます事イカの吐く墨と同じ効用をするものがある。又(四)自分用に暗きを照らす提灯が探海燈的に用ゆるものがあるらしい。又(五)何の意味もなく生理上止むを得ず光るのもある。丁度吾々の血が自然に赤く、草の葉が自然に綠であると同様である最後に

どうして光るか

と云ふ問題は中々むづかしい。第一に否定すべきは燐が光ると云ふ説である。若し燐なら燐中毒で光る前に動物が死んでしまわなければならない。そんならば燐でない外の物で光るものがあるかと云ふに、化學者の發見によると多くの有機化合物はアルカリの液にて極靜かに酸化すると光を放つのである。假令ばイーサー、アルコホール、油の類が光る。光る動物を見ると、黃色い脂肪の様な物質が分泌されて、其が海水に觸れて酸化して光るのが多い。然し其他にヤコーチユーの様なのは外の原因で體の一部が切れるときに光るのがあ

る。

何にしろ動物や植物に光ると云ふ現象は意外に多いので、吾々の目で見てない所に光てゐるのも隨分多數であらうと思ふ。吾人の體の組織も光つてゐるかも知れないが、不透明だから遮られて見ゐないのかも知れない。皆吾々には見ゐなくつても、他の動物に見ゐる光を放つものがあるかもしれない。

つまる所熱と光とは極近い親類の關係があるので、生活のある所に熱があれば光るのもさほど不思議な事はないのである、然し動物が其光を利用して前に記した通り、色々の効用にするに至つては、中々吾人の計り知るべからざる所である。かく海の光は暗き夜にも海の中に生活が存して居るのを示すのみでなく、如何に生活が奇妙なものであるかの默示てある。

天照大神と日本婦人

赤星仙太

吾人は茲に日本神代史の高等批評を試みんと欲する者に非す、所謂「神」の宗敎的意義に就ても殆んど呶々の要はなからむ、唯其間に活躍せる人物が時代を反映し時代を理想化し、就中天照大神の如きは日本女性の典型に相應しきを前提とすれば事足れり。

記紀の史實に徵すれば、弟君素盞嗚尊が海原に罷らむとて高天原に姉君へ暇請ひ申さむと爲られし時、兼々弟君の橫暴を耳にせられし天照大神、其の高天原の天下に禍ひせむかと危惧せられ健氣にも武裝して群神と共に出迎はれしと見ゆ然るに弟君は未だ無邪氣、何等惡意のありとも覺ゐねば、姉君自ら武裝を解き、親しく饁ひて遠征の門出を送らむとす、同胞の眞情誠に掬すべし。軈て馴るゝに從ひ素盛嗚尊漸く惡戯に嵩じ、家庭の淸淨と天下勸農の風とを傷くる事ゐし。姉君の威は女らしき威なりき、此期に及びて武裝せむには餘りに優し　淚と共に溢るゝ勸諭も甲斐なきを知りては身を置くに所なし、人知れぬ天岩戶に隱れて泣きに泣き給ふ（世或は大神の憤怒を云へど、吾人は此說を採らず）へ是に於て乎、群神憂懼措かず、之を慰めむとして終に珍寶を集め窟前に舞踏するに至る。大神乃ち其志を汲み笑を以て岩戶を押し開けて出でらる。天日爲めに光りありと云ふべし。史實は單に之のみ、されども天照大神が愛の權現たるを見るべきにあらずや、大神は歡びにも悲みにも淚を湛へ給ひぬ。淚なき婦人は枯木死灰に同じ　日本の「母」の祖先が斯計りに淚をかりしに比し、現代の日本婦人は如何、姉妹として母妻として主婦とし

て、將た友として一女性として悉く皆大神の心情に學ぶべき處多かるべしと信ず。

吾人と雖も今日の日本婦人を以て悉く涙なしと云ふ者にあらず、唯其の四周の境遇狀態の如何によりて影響せらるゝの結果、吾人をして往々日本女性の涙の潤ひ裕かならざるを思はしむ。日本の家屋は密室の祈念に適せざると同時に、思ふ存分泣くにも適せざる也。境遇の餘りに開放的なるは潤ふ可き品性を阻害し易く、たま〱以て人前を取繕ふ虛僞の涙を誘致するに止まり、惻々として人を動かす眞情の涙は容易に求む可らざるか如し。柩前に泣き崩るゝ猶太の泣男と、家兄の陣沒を聞いて人知れず涙に袂を漂せたる劉秀と孰れぞや。吾人は三千年の昔岩戸に隱れて涙をたれ給ひし女性ありしを喜ぶ。

世に涙脆き者多くは自巳の感情にのみ走りて的確なる判斷と正當なる行爲をなすもの尠し。病的なるヒステリーの如き涙の常に判斷を誤つが如きは暫く之を論外に措くも、吾人は泣く者の多數が自巳の感情に倭して他の當然なさゞる可らざる務あるを忘却せるを見る。天照大神に至りては即ち然らず。息も絶ねなむ嘆きの間にも猶人の好意と苦衷とを忘れ給はざりき。岩戸の舞に群神の配慮を察知し給ひし斯の如き大神なればこそ、後には交驩盡きも果てぬ同胞の間柄ながら寒心すべき風聞に對し威を以て備ふる事を得給ひしなれ。其愛や眞に義の蘇ありしを見るべき也。

天照大神が有し給ひし性格の一面は、慥かに其天眞爛熳なりし事なり。推量は身をも人をも誤まる、武裝して出迎ふるを知られし天照大神にして始めて弟君に他意なきを知り得べし。蓋し今日の弊は推量の濫用にあり、殊に女性に此傾向多しと云はる嫉妬てふ惡果は、推量を土壤とせる隔意の花の後に結ぶ。面と面と相合ふ所、言葉尠うして而も情愛相通じ得可きに何ぞ隔意に根もなき冗舌を産ませて、女口さがなしとの評を受けんや。智慧よりも美しき情に富むべき日本の女性があらぬ方に迷ひて其性格を卑うせむは怖しの極みならずや此點に於て一日の長を有せる外國の女性に學ぶまでもなし、理想的典型は近く天照大神に顯はれたり。

一種清教徒的氣骨ありし神代史の日本家庭（固より一面の觀察のみ）に於ては、目に見ゆる穢れは人の罪と見られき。然ればこそ、素盞嗚尊が狼籍漸く其度を高めて家庭の清潔を害ふ事多きを加ふるや、大神の憂愁遣る方なく甚く聖慮をなやまし給ひき。殊に其の新嘗屋を犯せしと云ふに至つては宗敎的の意味も充分籠れるを見るべし。信仰は固より違へど何となくカルピニスチックを偲ばしむ。世の浮薄を嘆きし昔しの修道僧はせめて己が室のみにても清淨に保たむと志せしと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

か聞く、如何に生活難と複雑なる世事とに逐はれ勝ちなりとは云へ、吾人は物質的にも精神的にも一層清浄ならむ心掛けの我が女性の間に勃興せむ事を望む。

素盞嗚尊第二の罪は農耕を妨げし事なり。大神は自ら機織を以て其天下を率ゐられ、農耕のぞよきを絶たざりき、之を妨碍する若同胞と雖も容すべきに非ず、戊申詔書は倹の方にのみ誤解せられて勤の聖旨を誤る事多き今日、勞働の神聖を教へて國是の振粛を促すもの此古記に優るありとも覺えず。一家勤勉の家風を作興し、何人と雖も之を害ふ能はざるホームを有せむには、權威ありて勤勉なる主婦の才能に須つ所多し。

天照大神は其家庭に無きを惜まれ給ひき。群神が鳩首凝議して其出御を待ち憧れしは、固より大神の聖慮を慰めむ爲めなりしならむも、他の一面は慥かに大神の不安が天日赫灼たるべき高天原の家庭に秋風莫落の感を與へたるに相違なし。斯く迄に重ぜられ惜しまるゝ女性は、世にも幸ひなるかな。

思ふに、柔克く剛をも制する天照大神を祖先と仰ぐは我が國民の光榮なるべし。況んや、如上の性格が我に先天的に存在して他の摸倣を許さざる特權とも考へらるゝに於てをや。唯惜むらくは時勢の推移幾多の後天的性癖を馴致し來れるを。蓋し一家を治むるは一國を治むるにも優る、母の膝は神の講壇なり淑徳高く賢明なりし天照大神を母と爲る日本婦人は其遺風を顯彰するに吝がななず、須らく日本家庭の特色を發揮すべきなり。吾人は

擱筆に際し、天照大神の理想的女性格の實現が基督教の信仰に精煉せらるゝ所多かるべきを一言加へ置かむと欲す。

海より

大塚楠男

一　靜寂

深き靜寂大海を領す
闃然として海休みぬ
舟人は鏡の如き海の面を
そゞろ悲しげに見まわす
何處にも風は死して
すさまじき死の靜寂よ
瀰漫のあなたにも
一波のゆるぐも見ゑず(ゲーテ)

靜かな海は色も響も、みんな悲しい思を起させる。山に育つた身の、而もやる瀬ない心で見るからといふ許りでもありますまい。もと〳〵海の運命は果敢ないやうに思ひます。際涯もない遥かの方に、水や空なるまぼろしの線を見てゐると、譯のない涙が流れ出ます。一片の雲でも浮んでゐる時は、心にたよりがある樣に思はれて氣強いけれど、松の梢に風も死

んで帆の影も鳥の姿も見ゑない時は、そゞろに戀しい寂しさが胸が迫つてまゐります。わたしは心が弱いからせめて强烈な物の姿を見る事がすきです。

嘗つて夕暮秋の野末を通つた時、笠に防ぎ切れない程の强い風でございました。大方の樹葉は落ち飛んで、裸になつた梢がピユー〳〵と風に鳴つてゐました。其時小高い處に大樹が一本、秋威に反抗して、世は今ぞ滅びよと威たけ高に吹きつくる蕭殺の風に、さらば生ある者の力を知れと許り、枝を張り幹をすぐにして、只獨り反抗の喚聲をあげてゐた其姿の、どんなにかゆゝしうございましたろう。一分に一葉散り二分に二葉、やがて落ち散る葉は、死しても倘已まじと天空に舞ひ上りて、滅亡の恨に咒咀の聲を揚げました。わたしは其樹に偉人最後の奮鬪を思ひよそひて、轉た愴悽の感に打たれながらも　何となきうれしい涙が落ちました。滅びるのは物の運命だけれども滅びるのは嫌です、滅びるにしてもわたしは大樹のやうにして吾世を終りたい。

靜寂な海よりわたしは怒り狂へる海を見る事が好きです、何時も獨り立つて讃美歌を唱つたり、考ひ事をしたりする巖が隠れて仕舞ふのは悲しいげれど、山なす怒濤が空を掠めて澎湃として寄て來て、萬丈の水煙を立てながら巖頭に碎け散るすさまじい光景を見てゐますと、舞ひながらも氣がすいて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

實苦しい心の壓迫が一時に取れた樣な氣が致します。こんなに荒れた日の翌日は大概は波が穩かですが、暫らくは尙餘勢で巖に衝る波のしぶきで着物の袖はシツトリと致します――わたしは之が可懐しい――、興に任せてこんな時は、裳裾かゝげて水に立つ事もありますが、砂が寄せて來る波毎に引かれて足許が其度毎に深みにズレて行くのには流石に氣持ちがわるう御座います。見てゐると波に打ち寄せられて來る藻くづ、木の端などがいくつも足に當る。幾月幾年を水に漂つたものとも知れませぬ。姿にも色にも只青白き死の影が表はれて見ゐる許り。不圖水の中にある自分の足を見ると、あゝ同じ青白い色ではありませんか。若し更に一歩を海に蹈み入れるならば、次の瞬間にはわたしの五體は藻くづと何の異る處がありませう。處詮は波間に浮沈する木の端と同じ運命と思ふと、冷たい、おのれを捨てるやうな笑が頰に上つてくるのも面白いとおもひます。

二 桔梗

松原を廻つて觀音堂に行く道は左が海、右は廣い草原になつてゐます。秋になると草花が原一杯の花の幕を敷きますそうな。然し今は只一面の綠の中に水引草や螢草の花なんどがさゝやかに誇つておる許りです。此處に來て暫しを逍遙に送るのがわたしの朝々の日課です。

ある朝。此の原に可愛らしい一本の桔梗の花を見出しました。楚々として朝風にゆれてゐる其姿、露にぬれてゆかりの色のあざやかさ。おゝ思ひ出多き桔梗の花よ、朝露にそなたの唇は寒かろと、兩の袂に花を抱いて暫しは去り難い程なつかしうございました。

あなたも忘れては下さるまい。あなたとわたしと二人してうちの御庭に遊んでゐました時、桔梗の一株に、赤ん坊の唇のやうな可愛らしい蕾がいくつ〳〵もついたのを、つぶすとポンと響くのを面白がつて皆破つて仕舞つた時、お母さんが咲いたらお父さんの御墓に供へようと思つてゐましたものをと、其時許りはお顏の色が變りましたつけ。其お母さんがお父さんのおそばにいらしつてから、今年で十年になりますよ。桃割に振の袖長かつたあの頃が可懷しいにつけて、お母さんさへ生きてゝ下すつたらと、限りのない悲しい願にわたしは今日迄生きてまゐりました。

顏さへ覺へぬ程のいとけなき頃分れたお母さんでも、一心に祈願すると神佛の靈驗で、遍路の旅の夕暮なんどには、其まぼろしを見る事が出來ますとやら。人の軒先に立つ程に落ちぶれてもお母さんと一所ならうれしかろと、矢張之も母樣持たぬ人が云ひました。誠に戀しいのは母樣。うれしいにつ

け悲しいにつけ、いつも〳〵わたしは母樣持ち給ふあなたをうらやましいと思ひます。

其昔蕾を破つて叱られた子は、漂浪に想に瘠せたる胸を擁きつゝ、其思出のかたみの花に亡き母の面影を偲んで、夢のようにたよりない苦痛に泣いてゐます。

三　蠑螺

堪へ難いのは夜更けて枕頭に迫る波の音、松の風、鐘の響です。響もなく音もなく、萬物悉く寂寞不動の境にあらば、却つて心を殺すたよりが多い事でせうが、想を誘ふ姿こそ尙執着の糸で幾重に身を縛るきづなと思はれます。

寐られない夜は家の老婆さんを招んで、いろ〳〵の話で伽をして貰ひます。昨夜はゆかしい事を申して歸りました。濱邊に打ち揚げられてをる蠑螺を取つて、耳に當てゝ、一心に念ずると龍宮の音樂が聞ゆると、此の土地では昔からの言ひ傳ひだといふ事です。山で、松子を拾つて耳につけると、通つて來る風の音の中に、亡きお母さんの聲が聞ゆると云ふのと同じなつかしさで御座います。遣る瀨ない心を持ちながら、蠑螺を耳に當る程に迷へない自分の冷い心をある時は恨めしくも思ひます。

立つて戸を押すと、海は深暗の色と岸を嚙む音許り、滿天の星屑燦として瞬いてをります。

四　梧桐

晴れたる日の午後は、蔭多き梧桐の下に籐椅子据ゑて、百步の前に寄せ來る波に吾心よへながら、時も知らず世も想はず、おのが儘の想に翼添へて、限なき大空を無碍に飛び走るこそ極めて吾心を慰めます。

日の光は繁り合へる樹葉の隙間漏りて、地上に錯落と亂れてまぼろしの繪をゑがきます。風サラ〳〵と梢を渡れば、其繪サト散れて、讀みさせる書籍の上に、消ゑて止まらぬ蝶の羽影かと、不圖誘はれて其行方に眼を擧げますと、金帆二三、忽然として松原のうしろをすべり行くなんど、嗚呼夢の香、夢の態　かゝる瞬間には實に吾身を忘れます。

晝の海は夢を見るにふさはしい。朝は憧憬の色強く、夜は追憶の念が餘りに多過ぎます。風のやうに行方も知らぬ自分の身は、悔知らぬ誇れる心より、晝の海に夢を見る事を口惜しいとは思ひませぬ。

こんな時わたしは、失禮ですけれど、御友達もほしくはないやうな氣が致します。ゆふべ〳〵はあなたの面影が戀しくて仕樣がないわたしですけれど、一味甘美なる寂しみに沒してうつとりと自分を忘れる時は、同じ調子に融け合ふ海の音

と自分とがあれば、吾世は充分だと思ひます。若きウェルテルが人の心は如何に不思議なるものぞやと云ひましたのも、吾が身の上でないかとも思はれます。

明日も亦晴らしうございます。夕焼の空いとまばゆく、焦爛の日、麗黄の雲、赫焉として紫焔海に流れてゐます。今宵も磯傳ひに小松原へ、例の芝生に腰下して暫らくは海と語らうと思つてゐます。

五　草露

丘一つ越した陰には魚が淵と云ふ深潭がございます。昔から其處の魚をとると祟があるので海の眺めは立派だと云ふ事ですが、自然と人足が遠く、擅に繁つておる蘆葦の爲めに道もそれとは分らぬ様に埋れておりますそうな。

昨日の夕ぐれ、わたしは此道を左に折れて町へ出ようと思ひますと、田舎には珍らしい姿の麗はしい、何れ都の人でございませう。薄納戸の洋傘にもゆる夕日を避けて、白地浴衣の裾長く、蓮歩をうつす度毎にチョロ／＼、と指先の奇麗な人で御座いました。擦れ違ひ様に、もしと私を呼び留めた瞳の沈んでゐる事、もしや病人ではないかと疑はれる程でした。見れば顏の色も青白い魚が淵へはどうまゐりませうかとの問ひなので、話に聞いておる儘を語り、御散歩ならおよしになつた方がとそれとなく止めますと、少時ば躊躇の色を見せて、然らばと路を變へて其人は濱邊の方へ、わたしは町へと其儘分れて仕舞ましたが、何とはなしに忘れられない印象を殘した人でした。

今朝起き出ると女中があはたゞしく驅けて來て、昨夜魚が淵に身投げがありました、蔦屋の客人で都から來た美しい娘さんだといふ。ハットして打ち騒ぐ胸を押し靜め、詳しく尋ぬれば確に昨夕路で遭つた人。

あゝ呪はれたる魚が淵よ。此の朝よ。何處如何なる人とも知らないけれど、又身を掠めて吹く風のやう、わたしには何のかゝはりはないけれど、それでも私は胸が騒ぎます。たまく路上に遭つて數語をかはした緣に何となく神秘の力を想はねばならぬやうな氣もするし、死なねばならぬ程の境遇にも涙は流れますが、然しく明日は、今日はと自分を殺す思ひを藏しながら夜なく枕頭に落ちる鐘の音を如何な心で聞かれたやら、夜更けて波の響を聞いてさへ、わたしは胸が痛みますに、丈にも餘る蘆を分けて幾年か人に知られぬ巖の上にスツクと立つて、然らばと最後の念を海に投げる時、彼の人の胸の中は如何な思でございましたろう、面は靜かな海の水も底は湧き返へる潮路だと申します。只さりげなぎ人と思ひましたに、胸には此世を消す程の悲痛が冬の嵐のやうに荒れ狂つてゐたので御座います。

濱へ出て見ると噂で寄つて來た人々が、諸處に集まて其人の話許り、捜索の舟四五艘櫓の音勇ましく出かくるのもあはれを添うる種でした。海は只何事も知らず顔に寄せ來つては返へし行く永劫の姿を變へません、海は大きいけれど寂しいと今日はつくく思ひました。

涼風や青田の上の雲の影　（許六）

日本に於ける夏の經驗

コーツ夫人談

私は日本に參りましてから、今年の九月で丁度滿廿三年に成るので御座ひますが、其中夏は東京で三年、甲府で一年、故國で三年、輕井澤で二年、函根で二年、日光で三年、札幌で一年、殘る最近の八年は松島近くの高山で過しました。永い間のことで毎年の夏何處でどういふことを行つたかといふことは、よくも覺ゑて居りませぬけれど、小さい事柄でも案外によく記臆に殘つて居ることもあり、中には今から追想しても樂しいことや、怖しいことや、自分で可笑しくなる樣なことも御座います。先づ日本の景色の美しいことはまだ來ぬ前から聞いて居つたのでありますが、殊に名高い

富士山

の最初の印象は實に淸く奇麗なものでありました。丁度私が日本に着いた時には空に雲があつて、海の上から其の淸姿を見ることが出來ませんでしたが、後で思へばそれは却て幸であつたか知れません。其後私は麻布の英和女學校に居つた時です、今でも日を覺ゑて居るのですが、それは十一月の十日土曜日でよくはれた秋の日で御座いました。私はまだ道

も知りませんかつたけれど、會話の本を手にしてぶらりと獨で散歩に出かけました。其頃は未だ多くの人家もあの邊にはありませんかつたから、直ぐ郊外に出られるのです。ある街角を折れるとズット向ふに牛小屋があり牧場には白い牛や山羊が三々五々立つて居ます、と其小舍と相對してコンモリと茂つた松や櫟の森があつて、丁度其の間から秀然としてもう上の方には白雪を頂いた富士の崇高なる姿が現はれたではありませんか。丁度街角を曲るとパッと開けたのでしたから、實に意はぬ時意はぬ處で繪の樣な美しい姿を見た、其の時の光景は今に至るまで忘れられません。

初の夏は輕井澤に過しました。丁度日本に參つた頃、出來上つた鐵道は東京と横濱間やがて國府津迄位でしたらふ。靜岡に參る途中函根に一泊したことが御座います。勿論餘程開けない時でしたから、私共は何か用があれば皆樣のなさる樣に手を叩いたのです。すると女中が出て參りまして私共の氣付かなかつた柱のベルの釦を指して、用事があれば之れを此樣に壓しなさいと、色々行つて說明して呉れたには、餘りの可笑しさに一同大笑いしたことです。輕井澤に居た時は誰でもする樣に私も友人と一所に

淺間山

に登りました。二三年後富士山にも登りましたけれど、淺間の方が景色がよほど善く御座いました。勿論それには登つた日にも因ることでせふが。大概の方は晩方出立して曉方頂上に達する樣するのですが、私共は夕方から登り初め夜の十時頃頂上近くに著き、窪地を探して毛布をしき傘をさし野宿を致しましたが、風の吹き廻し方で噴火口から吐くガスがかゝると危險ですから、一人の伴の男子の方が始終見張りをして居つたのです。すると丁度夜の二時頃番人が私共を急に起しました。何事かと愕き目醒めると、今しも丁度噴火口の中は水蒸氣が全く無くなつて底までよく見ゑるといふのです急いで絕頂に攀ぢ登り下瞰すると、まあ底の方は眞紅な炎と熔岩許で丁度大きな火鉢に赫々と炭火を燒いた樣、其の物凄さ怖しさに暫時は誰も物を言はなかつた程で御座いました。斯く噴火口がよく觀ゑるのは滅多にないことなそうで御座います。

翌朝になると、今迄上にあつた雲は次第に降りて私共の遙か下方に擴がり、一面渺漫として海の樣で、諸方の淺間よりも低い山々は只其の峯嶺丈を雲の中から突出して宛も海中の靑螺の如く實に身は是れ全く天上界にあるの思がしました。暫くすると日が昇るに從ひ雲も次第に谷を出でそれが噴火口に向け眞逆樣に吸込まれる樣に這入るのです。やがて噴火口

は渇して呑める丈の雲を呑み盡すと、熱火で之を膨脹して千丈の烟となし飄然として眞直に噴出するのです。其光景の偉大莊嚴なる誠に自然の神壇の前にたつの念が致しました。此處に居つて御覺えて居ることで可笑しいことは

蚤に苦められた

ことで御座いました。故國には蚤は殆んど居りませんが、私の借りた家は餘程古い日本屋でありました故か、澤山な蚤で毎晩苦しめられ蚤取粉も全く役にたゝず、あれには一番閉口致しました。其頃丁度ニューヨークの動物學者は蚤の研究をするため、蚤千疋を五圓で買ひ求めるといふ廣告を或雜誌に出しました。あまりの苦しさにもし是れが國であるなら採集して大分金もうけをされるのだなどと思つたこともあります。

三年目の夏は甲府に暮しました。此處には三年も住んで居りましたが當時は鐵道は八王子迄しか出來て居りませんでしたから、東京に參る時は富士川を下るので、私は丁度十三度許あの川を下りました。一度は御用で夜の二時に甲府を立ち鰍澤まで參り、其處から再び富士川を下り、岩淵に出で汽車で東京に夕方著き用を濟まし、其翌朝東京をたちました。例時もならば國境の笹子峠の手前で一泊するのですが、其時はどうしてか非常に急ぎ、荷物を人足に負はせ二人で彼の深山を

夜中に山越

したことがあります。今から顧ればあんな亂暴なことをよく平氣でやつたものと自分ながら怖く思ひます。今程世の中の危險なことを知らなかつたのでせふ。

或夏は名古屋、岐阜、津、奈良、京都、大阪地方を旅行致しました。岐阜の飼鵜は何より珍しく其他の地方もそれ〴〵面白う御座いましたが、一番樂しく愉快で堪らなかつたのは名古屋の知事をして居た方の御孃さんに招かれて十日餘も親しく起臥を共にしたことであります。其頃としては日本の家庭を外國人に開放するなどいふことは全く珍しいことで殊に其の親切なる待遇には深く心を動かし、日本家庭のまた一面に深ひ素養のあることを知つて驚きました。

函根には二度參りました。函根の夏は私には忘れられないもので最もよく覺えて居ります。これは、ミスターコーツに伺はねば申されぬかも知れませんけれど、或朝早く二人でボートに乘つて湖へ出ました。あの靜かな湖心に出ると山影樹影逆に映じて、諸所の谷合にはまだ雲が低く迷ふて折々鳥の啼く聲がする許、全く自然の美に溶けて了ふ樣であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此時で御座いました平氣で舟を漕いて居つたミスタ、コーツが私に突然

結婚の申込

をしたのでした。そんなことで此の夏と函根は忘れられぬものとなりました。

此他日光にも居り此處も函根も輕井澤も共によい地には相違ありませんけれど、私にとりて尤もよく感ぜられる處は高山で御座います。尤も七八年も參りましたことですから無理もありませんけれど、若し今故國に居るとして働や友達のことを考へずに唯土地丈者のために、再び日本に來たいとすればそれは高山の外ありますまい。彼處は人家も遠く、目に入るは只海と空と耳に聞えるものは浪の音と松の風許で、彼處に居れば自分は日本に居るのでもなく、外國に居るのでもなく只神の國に居る樣な思が致します。次に

濱の夏期生活

は夏ですから、家ほどに規則的には萬事行きませんそれで夏は先づ子供の爲に暮す子供中心主義でなければならぬと思ひます一。日の仕事をざつと申上ぐれば、朝は大抵六時半頃まで起き揃ひ飯前にお祈を致します。祈の時は子供に每朝更く々自分の好な歌を撰ばせます。朝飯の間に父は聖書の話を讀んで聞かせます。昨年はバードのナザレの大工を讀みました。今は同人の著でパウロの話を讀んで居ります。此外ヨセフ物語などありますが、此人の著は每朝一章宛小供の讀める樣、極く平易に面白く書いてあります。次に小供逹は洗濯の日ならば男兒がテーブルを片付ける、女の子は寢臺を片付けたり致させます。次に雜巾かけそれが濟めば後は皆んなの勝手。

主人は朝の中は自分の研究物など致し十一時頃から海に入りますか、或は午後の三時頃に入る人もあります、私共では午飯後一寸晝寢を致すことに定めておきます。一時間許休に入るのですが此間は家の中が靜かになる定でありますから、眠くない人でも本をもつてなり床に入つて居ます。二時半頃再起きて子供の好きな飲料を飲ませ、それから又海に入るのです。四時頃家に歸つて一同で運動に出掛け、それから歸つて夕飯。守は連れてゆかぬ故私は色々用が多う御座いますが、私は主として無沙汰を致して居つた人に手紙を書くことに定めて居ります。時としてはクリスマスの贈物に對する御禮が夏まで延びる事もあるので厶います。午飯の時主人は子供に色々歷史の話、夜の卓子では小説とか面白い譚話を致すことにしてあります。昨年は有名な人のかいた詩や、聖書の

金言から、覺れて居つて一生のためになる樣なものを撰び、毎日一つ宛子供に暗誦させました。毎日一つ宛覺れ日曜には全體をさらふのです。兎に角夏は小供を中心として、殊に平生忙しくて小供と接する機會の少ない父は、よく子供の敎育に心を傾ける時であります。

今年の夏

は例年より一月程をそく海岸に參ります。それは七月上旬には主人は上から四人の子供をつれて、甲府、名古屋　岐阜津、奈良、大阪、神戸京都地方に旅行を試みました。これは全然修學旅行の樣なもので、甲府なら水晶名古屋では御城の拜觀、奈良はいふ迄もなく、大阪では造幣及試所の工場等を見物致させる筈です。子供には出發前此等のことに就てそれ〲一先づ學んで居りますが、目の當り實見したところを各自が思々の見方で書き、父が之れを訂正し歸宅してから一冊の太きな本にかき込みます。それは先から子供に與へてあるのですが、方々の見物など又は何か面白い出來事のあつたとき、各自が思通に書いて置くのです。其の本の題も或は日本の景物と經驗とか、日本で樂かつたことなど各自名々で御座います。（了）

老癈兵

（二）

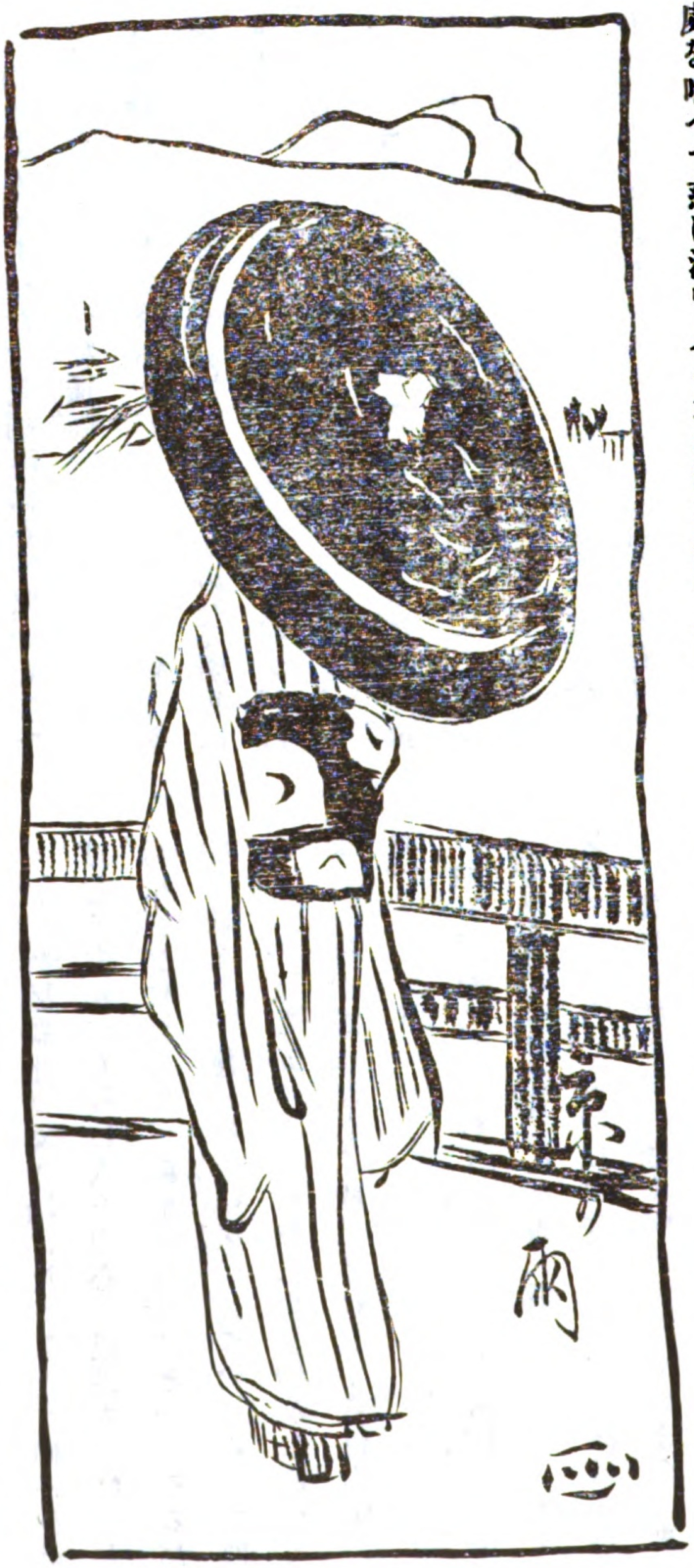
くすを

ある夏の晴れたる日ウインナ公園で一大國民祭が催された全市民は此美しき場處に出かけて、ウインナ人が特に好んでやる、テントを張つて其中で盛に飲食をした。貴賤老弱の別なく悉く此日を樂み、加之多數の外國人さへ此祭を祝する爲めに入り込んで來た。情深い人が寄つて來る場處には、又必ず其慈善心に訴へて物を貰はうとしてゐる人があるもので、此處にも數多の不具者や乞食などが錢を獲ようと集まつてゐた。

此連中のうちに年寄つた一人の癈兵がゐた。「若い時は兵士、年老いては乞食」といふ俚言があるが、丁度その俚言に當てはまる身の上であつた。彼は無論直接に乞食をしようとは思はなかつた、若い折り習つた覺のある胡弓を奏いて、上手でも下手でもそんなことに頓着なく、出來るだけ奏く事にして、心の中では、自分の音樂には何等の價値がなくつても白髮の頭や、義足や、又は地圖のやうに見ゆる繼ぎ合した着物を見てくれたらとそんな事を賴みに思つてゐた。胡弓はお父さんから習つたのである、戲談に世間でボヘミヤ人は胡弓

をひきながら世界を流浪すると云ふが彼れのお父さんは其ボヘミヤ人であつた。

癈兵は人の往來の多い路傍にある楓樹の下に立つて、流行後れの調子を奏いた、彼は自分の犬を自分の前に座らして、古帽子の縁の處を啣へて慈け深い人々がお錢を投げ入れてくれるのを受けるやうにかね〳〵馴らしておいた。今日も亦彼は其處に坐して滿心の情を籠めて奏いた犬も同樣に其處に坐して古帽子を口で持つてゐた。けれども人々は戯談ながらに冷笑して行き過ぎて仕舞つて、帽子は虛のまゝであつた。午後も大分遲くなつて來て、そろ〳〵群集は歸り路に就き始めたが尚帽子には只の一錢も入らなかつた。沈み行く太陽と同じく彼の希望も殆んど消え失する許りであつた。心は深き悲しみに充ちて、世の波風にあれた顏には彼の心の苦しさがあり〳〵と讀めた。



此處に先き程から立派な容子をしてゐる紳士が一人、癈兵の立つておる處からさ迄遠くない處に、樹の幹に倚りかゝりながら、長い間癈兵の音樂を聽いて、深くも感じた同情の面持で熱心に見てゐた、癈兵は之には少しも氣が付かなかつた。癈兵の手は疲勞れ切つてもう弓を搔かす力もなく脚もくたびれて立つてゐる事さへ六かしいので、彼は此爲に用意して樹の下においてある石の上に腰をかけて、悲しそうに手で額を抑へた、そして地上に人知れぬ淚をハラ〳〵と流した。

二

古いリンデンの木に倚りかゝつてゐた外國紳士は、癈兵が三本きり殘つてゐない指でひそかに流るゝ涙を拂つてゐるのを見ると、すぐと癈兵の方に急いで、驚いてゐる老癈兵に一個の金貨を渡し、一寸私にその胡弓を貸してくれと癈兵の胡弓位まづい言葉でかう云つた。癈兵は滿心の感謝の情を以て紳士を見上げてゐる許りであつた、此胡弓はそう惡いものではなく、只奏く人がむやみとそれを掻鳴らしてゐたのであつた、紳士は調子を律へて癈兵のまぢかに立ち、「仲間よ帽子を持つて金を集めろと」云へながら、胡弓を奏き始めた。癈兵は自分の胡弓は何處にこんな美しい音色を持つてゐるのか、何故此紳士に許り妙音を貸して自分には貸さぬだろうかと、尋ねて見たいといふ樣子で胡弓を眺めてゐる。胡弓の響きは其儘に歌の樣に思はれた。不思議な感情が聽衆を醉はせて仕舞つた、ある時は天使の歡聲が胡弓の糸に通ふかと疑はれ、或る時は又なやめる人の悲しき心を訴へる樣にも響いた。今やあらゆる群集は立ち止まり誰れ一人として行き過ぎる者はない。人々は息を殺して美しき音調と律呂に聽き惚れて、群衆の環は益々大きくなつた。貴顯の立派に輝いてる馬車さへも止まつた位である。

此出來事の眞相が明かになり、可憐な胡弓手に同情を呼び起す爲めに外國の大家が、癈兵に代つて胡弓を奏いておると云ふ事が分つたから、古帽子の中へは澤山の金が投げ込まれた。各々の持てる儘、心の儘に金貨、銀貨 銅貨が惠ぐまれた、それを癈兵は默つて受けてゐた、犬は甘く行く今日の仕事に主人が干渉しておる事を怒つて呻つてゐるのも面白い、終に帽子が一杯になつたので癈兵はそれをあけねばならなかつた、外國紳士は奏き續けた、そして帽子を再びあけ代へねばならなかつた程に人々の心を感動させた。之を見た紳士の目は喜びに充ちて、群衆が靜淑に聽いてゐるだけ奏いた。一曲を終ると不意に拍手喝采が起つた。そして彼が再び奏き始む迄はやまなかつた。群衆は再び靜かになつて心臟の鼓動も聞ゆる樣、或は悲しく或はうれしく音色の儘に群衆は感動した。

日が暮れるにつれて冷くなり空氣も濕つて來た。今や歌は「神よ皇帝を護り給へ」の曲に移り行いた、オーストリヤ人で此曲を知らないものは尠ないので、群衆は各自の帽子を脫つて、合唱し始めた、漸々聲が大きく高まつて來た。胡弓手は極度の熱心を以て奏いてゐたが、俄かに彼は癈兵の手に胡弓を返へし、自分の帽子をとつてなづがしそうに挨拶するよと思ふまに其姿は群衆の中に消ゑて仕舞つた。癈兵は難有う御座いますと御禮を云ふ暇さへなかつたのである。

群衆は暴かに癈兵をとりかこんで今の人は誰だと口々に聞

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いたけれど、癈兵は一向存じません、神様が私を助ける爲めにあの人を送つて下すつたので、さもなければ私は今餓死する處で御座いました、と答へるのみだつた。

其處に群衆の一人が進み出て、私は彼れをよく知つてゐる「彼は有名な胡弓手のアレキサンデル、ボウヘルといふ人で二三年前からウインナに住んでゐる、今日は慈善の心から彼れの技を試みたのだ、吾々は彼の行爲を忘れたくないものだ諸君、ボウヘルは吾々が全然忘れて仕舞つてをる、此の老癈兵の爲めに胡弓を奏いたのであると云つて被つてゐた帽子を脱いで差し出すと、群衆はも一度金を入れた。此の紳士は癈兵の袋の中に其金をあけて、ボウヘル萬歳と叫んだ萬歳〳〵〳〵と群衆も一所に叫び出した。癈兵は熱き喜悦と感謝の涙にくれ、手を拱んでボウヘルの幸を神様に祈つた。(ホールン)

ブース夫人傳を讀む

薔薇園主人

米國の前大統領ローズヴエルト露國のトルストイ伯と共に現代の世界的偉人を以て目される英國の救世軍創立者ブース大將が一生の事業には、實に彼のより良き半身として彼と共に犠牲献身の光榮ある生涯を送つた夫人の補助協力が大に與かつたことは疑のない所である。實にブース大將夫婦は女皇ヴヰクトリアとアルバート親王及ロバート、ブラウニング夫婦及カノン、バツトラー夫婦と共に十九世紀の英國にあつた四組の理想的結婚と稱讃されたものである。何故かといふに是等四組の夫婦は男女何れも其天才と技量とに於て相匹敵するものであつたが、各々其天才を充分發揮した許でなく、其家庭は實に圓滿幸福なるものであつたからである。中にもブース夫人の如きは最も美はしい信仰を以て大將と志を同うし、暗黒社會と戰ひ世に棄てられた罪人救濟のために、全く自身の安樂を忘れて、奮闘すると共に、家庭にあつては理想的の世話女房、理想的の賢母として其生涯を送つたとは、實に近世式の世界的婦人といはるゝに耻ちないと思ふ。救世軍と云へば直に彼の街頭を太鼓を叩き軍歌を唱ふてゆく行列を連想して、救世軍の母と云はれたブース夫人は常識を逸して狂熱じみた騷々しい性格の婦人の樣に思はれるけれど、決してそうではなかつた。夫人は實に理想極めて高く理性に富めるとともに、又心柔和にして内氣で謙遜なる德を具へ、且之を包むに濃かなる愛情のあつた婦人である、彼女が後年其良人と共に各地に傳道し、或は自ら壇上にたつて說敎するに至つたのも、御轉婆な性質からしたのでなく、畢竟自分の僞らない

信仰と、止むに止まれぬ使命の自覺に動かされ、深く神靈の導に信頼して行つたのであつた。それで斯る性格は如何にして出來たかといふに、それは全く

少い時の敎育

に由るのである。夫人元の姓はマムホルド名はカザリンと云ひ、英國の田舍に生れましたが、幼少の時から兩親と共に倫敦に移り住んで居つた。其母は貞賢なる婦人で、孃が都の惡き風俗習慣に染むことを心配して、自分が其子の友となり遊び相手となり、敎師となつて、家庭敎育の一切を盡したといふことである。父は職業の傍ら敎會の傳道を助け信仰篤き人であつたので、家庭は常に愛と信に充てる清い宗敎的空氣に溢れ、夫妻親子の間の談話も救とか禁酒といふ樣な問題であつた。此點は丁度米國近來の偉大なる婦人、社會矯風會の創立者たるフランシス、ウキラード孃の家風と似て居る。清い信仰の空氣を吸ひ美しい情愛の中に育ちた子女は長じて立派な性格ある人となる許でなく、其人格を通して家庭より湧き出づる清い水を汚れたる社會に灑ぐ者となると見ゐる。さてカザリン孃には三人の兄弟があつたけれど皆早死して、無事に生長したのは孃一人丈であつた。孃はかゝる父母の許に育ち、幼い時から聖書を讀むことを學び、既に十二歲の時

には創世紀の始から默示錄の終まで八回も之を通讀して居り其頃から少年禁酒會などに關係して居つた。孃の愛情に富んで居つたことは次の逸話でわかる。

或時孃が外で遊んで居ると、警官が一人の醉漢を曳きたてゝ、大勢の野次馬連が其後に接いて口々に醉漢を罵詈惡口し乍ら行く。孃は之を見てひどく其醉漢に同情した。そして自分は斯樣な困つた人をも見棄ないといふ心で警官と相對して醉漢を警察迄送つて行つたことがあつた。又或時馬車で街頭を行くと、向の方で一人の若者が金槌を以て甚く驢馬を打つてるのを認め、見るに堪へかねて馬車から飛び降り、馳せ付けて、若者の手を抑へ金槌を奪ひ、動物を虐待してはならぬことを言つてきかせましたか餘り心を苦しめ氣を張つたので自然氣が遠くなつて倒れたことなどがあつた。孃は斯く少い時から世の弱者劣者や動物に深く同情があり之を憐む心に富んで居つた。

斯樣にして孃は家庭の溫き愛の中に生長し、其良き地に播かれたる信仰の種が、次第に芽を出し育ちて遂に美しい花を咲く樣になり、他日立派な果を結ぶ基となつたのは、孃が十六の時である。是迄も眞面目に神を敬ひ之に奉仕へて居たに違ひはないが、孃は此頃になりて切に自分が神の子である救はれたる者であるとの確信を得たいとの自覺が生じて來り

其爲に隨分と心を苦め數週間も煩悶を累ねたのである。然に或朝床より起る時、何心なく枕頭の讃美歌を開けた時、平生よく知つてる歌で

我神よ我は汝の有なり
是は如何に聖なる慰藉ぞや
我耶蘇は我有なりと知るは
是れ如何なる祝福ぞや

といふ一句に目がとまりました、是迄何遍も此歌を唱ふたけれど、今程其歌の眞意が自分の心に徹底して、深く味はれたことはなかつた。然に今や孃の靈眼は豁然として開け今迄見ゑなかつたものが明かに見ゑ、一切萬物を浸透する神の愛を悟ることが出來、自は是れ罪より救はれたる神の子なりといふ自覺を得たのである。孃はそれより益々歡喜と感謝に充ちたる日を送つて居つた。カザリン孃は斯る美しい信仰を以て毎日曜敎會に出席する許でなく、自ら進んで日曜學校の敎師となり十五人許の女學校程度の娘達の一組を受持ちました。孃は非常な熱心を以て組の生徒に聖書を敎へ又之を導くので生徒も大變孃を慕ふて、萬事打解けて其心中を明かす樣になつた。而して孃が始めて

未來の良人

たるウヰリアム、ブースと相識るに至つたのは此時の事であつた。彼等二人の相識るに至つたのは世の才子佳人が花鳥風月を媒にするとは異りて、實に眞面目なる信仰が緣となつたのである。或時其頃倘青年說敎家であつたブースが丁度カザリン孃の出席する敎會で說敎をしたことがある其說敎は深く孃の心に適ひ强ひ印象を與へたのであつた。然に其後其敎會の或有力者の家に多の客を招待した時ブースもカザリン孃も其處に出席して

居つた。ブースは其主人の强請によりて禁酒の歌を暗誦した所が自然客人間の談話が禁酒問題に及び、多の人々は酒は法令で禁じても無用だ、吾々は節酒で澤山などゝいふ意見であつたので、日頃から嚴正な禁酒主義を抱いて居るカザリン孃も堪らず、極く謙遜な態度ではあるが熱心な調子で反對の意見を嚴乎として言ひ出したといふことである。斯る機會が緣となるに連れ、ブースとカザリン孃とは其信仰に於て、其宗敎上の意見に於て互に相投合する所あり、互に敬意を表する間柄となり、軈て相思の人となり終に許嫁の約束を結ぶまで進んだのである、斯樣に二人は先づ其精神に於て思想に於て相一致抱合したものであるから、非後は互に敬愛砥勵して其信仰を磨き才能を發揮せしめ愈々人格を向上したのである。

彼等の出發點は誠に理想的であつた。彼等の婚後の生涯も亦理想的であらざるを得なかつたのである。二人の約婚の間は實に三年の久に亘つたけれども、二人は神の許の來るまで心靜かに俟つて互に敬愛の度を愈々深くし、又愈々能く相互を識り、理想に向つて相勵まして進んだのであつた。此の間二人の間に交換した手紙は如何に二人の情愛が濃かにして、理想的で美しいものであつたかゞわかる。二人の約婚を結んだ前二日カザリンがブースに與へた手紙の中にかう云ふて居る。

御君が此事は誠に神樣の御旨であると充分滿足することを承認なされる迄、私は決して斯る重大な契約を結ぶことは出來ませぬ。併し御君にして此確信を有たれるならば、境遇は如何にもあれ其成るか儘に成り行かしめ、何事が起るとも頓着なく御互は一つに成るべきで御座います。來らん日には二人が神の前に跪き、我等二人を新に神に獻げ又相互に與へ度く存じます。扨其後は我等と我等のことは擧げて神の手中に委ね、其の全智至仁の守護に一任するの外ありません。私は重ねて御君を神に委ね奉りまする。御君を過に陷れてはなりません、又決して陷れたり致しませぬ。何うか御互に全心全力を込めた祈禱で神の御座に進みたう思ひます。

彼女がブースと相許すに至つたのは、實に之を神の御旨であると充分心より滿足して自覺した故である。當時ブースは只の靑年で勿論財産とてもなく、又各別家門が高いのといふ譯でもなく、將來の方針すら確定して居なかつたのである然にカザリン孃はよくブースの心中に伏在する偉大なる一物を認め、二人の上に立てる同一の至高者に依りて盟約を結んだことは實に達識と云はねばならぬ。家門や位置や財産は只外側のものである。學問や才能も若し信仰の根が無かつたならば造花の如く枯れ萎む時が來る。獨り何時迄も榮ゐるもの

は、永遠の神に連なつて居る信仰の上に立つものである。彼女は能く此の靈的消息を解して居つた。

彼女は實に斯くしてブースの良い相談相手、助言者となつた、未だ年若くして經驗ないブースが社會に出で、種々なる困難や情實と鬪ふて思ひ惑ふ時、彼女は何時も信仰と思慮ある考を以て彼を勵まし助言したのである。或は傳道と說敎に忙しくてブースが自己の修養を怠らんことを怖れて、旅行中は如何すれば最も時間を儉約して讀書し得べきかを考へて遣つたこともある。或は說敎に就て希望と注意を與へたこともある。凡そ彼女はブース自身を愛すると共に、彼の事業に對しては同等の熱心と興味を感じ、其責任を一つにしたといふべきである。されば彼等が愈々結婚するに至つては、二人は最早一心同體となりて其救世の事業に就て考へ、實行したかの樣に見ゐる。凡そ理想の妻としての一條件は、能く其夫の目的事業を解し之に無限の同情同感を與へうることである。此點に於てブース夫妻の如きは全く其目的に依て固く結付けられてあつたものである。宜なり彼等が婚後の生涯は實に目覺ましい向上の生活であつたブースが救世軍を興し世界的の救濟事業を以て名を世界に知られる樣になるや、彼女もとして世界にある多くの信徒の敬愛を一身にうけたのである。併し夫人は救世軍の母としてのみならず、ブースとの間に擧げたる多くの子女に對しても、實に賢母の稱があつた。彼女は夫と共に外に向つて活動することをしたけれど、是れが爲め決して其子女の家庭敎育を怠り家政を疎末にするものでなかつた。否彼等二人は其子女を以て神からの預り物として丁寧に之を育て、之を神に獻げて薰陶したのである。世には其子女を幼時には乳母に一任し、長じては學校や寄宿舍に任せ切りで安心して居る人もあるが、斯の如きは神の命じ玉へる人の親たる者の本分を無視する者であると思ふ。されば彼女は家庭に於ては質素なる生活をなしつゝも、其子女を愛育し手づから其の衣服を裁縫し、其食物を調理したといふことである。

最後に彼女の性格の最も美はしく見ゐる點は、如何なる場合にも其**良心に於て神の聲を聞き**柔順に之に從つたことである。彼女がブースと共に窮民の間に侵入して、傳道したり或は講壇にたつて說敎したりしたことは、決して天性の御轉婆心から行つたものではない。彼女は元來內氣で淑やかな婦人であつた。然し彼女が其天職に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

對する自覺が明かになれば、なる程、其内心に於て神の聲を聽かざるを得なかつた。モーゼがエホバよりの使命を感じつゝも、進んでユダヤ人を埃及より救出す迄は、長い間内心の煩悶をなしたる如く、又基督が荒野に於てサタンの誘惑をうけて之と奮闘して勝ち玉へしが如く、彼女も斯の如き大膽なる行動に出づる迄には、常に内心に於て幾多の奮闘を重ねたのである。或時彼女が敎會の集に急ぎ行く時、ふと路傍の長屋の窓より多くの婦人が外を眺めてお喋りをして居るのに氣がつき、今自分が良い說敎を聽いて自分を益せんと思つて急いで居るより、自分は多少遲れても此等の憐れむべき婦人を導いて敎會に出席させた方が御心に適ふでないかと、いふ囁が聞えた。しかし斯る行爲は到底尋常一樣の事でないから、暫く呆れて躊躇して居ると重ねて良心の聲がするので遂に奮然として意を決し、心臆しつゝも或家の門にたち、婦人達に話かけたのである。然に彼女の親切なる決心は空からで多くの婦人は集會に出席することを約束した。之に勇氣をゑて彼女は更らに次から次の家へと歷訪し、或家では酒に醉ふて其妻子を泣かせて居つた醉漢を改悔めさせて禁酒を斷行させたこともあつた。

彼女が自分で講壇に立つ樣になつたについても同樣の經驗があつた。まだ年若かつた頃夫人は夫と共に或敎會に出席し

たことがある。種々他人の感話など聞いて居る間に、夫人の心は著しく動いて自分も起つて神の惠を謝しせねばならぬ樣に感じた併し其頃愼ある婦人が集會の席上で起つて語るといふことは殆どないこと故、內心で種々と又一方から申譯を作つて之を拒まふとする。最後には、今日は用意もないから、人前で失敗して耻をかく樣なことがあるに違ひないといふ囁がきこゑた。是に於て夫人は決然として此誘惑を却け自分は基督の爲に馬鹿となつて耻をかいても可いと決心して壇上に起ち其の感ずる所を述べ、一切を神に捧げて奉仕る旨を告げた時に多くの聽衆は淚を流して感動したといふことである。其後夫人は屢々壇上にたつ樣になり、最も力ある說敎をなす樣になつた。斯の如くブース夫人の傳記を繙き來ると、吾人は彼女が常に其內心に於て至高者の聲をきゝ、之に反抗するものは惡魔の囁として、例時も斷然之に打勝つて、神靈の導きに全身全靈を委せ、其他の事は毫も顧なかつたことは誠に美はしい性格で、是れ實に彼の傳記を讀む者に大なるインスピレーションを與ふる所であると思ふ。（了）

日ぐらしの聲する山の松かげに岩間をくゞる
水の涼しさ
（後藤大寺）

文苑

月光

松川信男

○大空の月の光のさやけさをかなしむほどになれるこゝろか

○かへり來し鷗とともにかなしみぬ大うなばらの夏の夕暮

○夕立す夏の大空そのもとに一輪赤き花のゆらげる

○初夏の雲を仰ぎて白浪のおどれる海に我はうかびぬ

○なにものか心の海をかき亂しものゝ哀れもうつらずなりぬ

霹靂

佐藤茂

○沼尻の疎き木原に白の駒七つ嘶き霹靂のする

○肩ほどの青萱擦りて來る風はわが寢る床の杓楪を吹く

○強き風大夏雲をなびかして山頂の岩芝を吹く

○地獄蟲築地に圓く巣つくりて釣鐘草の咲く日となりぬ

○螢來てすゞしろの花夏菊の赤き花にも青き火を置く

○焔をば爐より掘りて百千たび投げしが如く柘榴の咲く

○茱萸の木に上りて赤き實の汁をすゝりてあれば虹あらはれぬ

○青嵐ながるゝ室に蜻蛉はプラチナ色の翅ひろげ來ぬ

講壇

自然の兒

海老名彈正

我々の生活を分て考へると二つになる。即ち一は市の生活で、他は野の生活である。市の人が會堂などを建築して禮拜をなすことになれば、所謂禮儀三百威儀三千と云ふ譯で色々な禮儀作法が出來、莊重な制度が定まる。けれども他方を見ればかゝる煩雑なる生活に堪へずして、草を枕の野の生活を慕ふ者がある。此二つは時あつて衝突し、時あつて調和しつゝ幾千年の歷史を作つた。野を戀ひ、川を慕ふ自然の情は、人類の久しき間經過せる習慣に基くもので、人の性に適合して居る。生れて來る時には皆裸で高きも低きも變つた事はない。王侯なればとて錦を着て生れる譯でもなければ、貧民だとて菰を纏ふ筈もなく、全く自然の兒として世に出づるのである。死ぬる時も又同樣で、何をも持つて行く事も出來ず、唯一人黃泉の旅に赴かねばならぬ。親も兄弟も之に從ふ譯には行かない。赤裸で生れた身が又赤裸で見ず知らずの處に行く、これが人生の眞相にして同時に自然の兒たる所以である故に昔から都の煩はしさを避けて靜かに湖山に居を卜し、澹として巖間一流の水の如く、世を送れる人の第一の題目は、貧乏な生活である、食物も山海の珍味は愚、新しい魚さへ食はずに野山の物で腹を充す。又衣服や住居なども、誠に見すぼらしいもので、都のものとは大分違ふ。次には獨身である妻あり子ある人は自分の好きな事ばかりも出來ぬが、獨身なれば何の拘はる所もないから、其生活は至つて簡易である。如斯生活は一寸考へると、下等動物に近い賤しむ可きものゝ樣に思はれるが、決して左樣ではない。その中には面白い所、貴い所があつておのづからなる趣がある。都府の生活には淫樂、名譽、虛榮等が伴ふが、自然の生活をなすには、此等の物は悉く拋たねばならぬ。啻に然るのみならず、時あつては人生の慰籍たる家庭をすら拋つに非ざれば、之に入る事は出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

來ない。然らば何が故に彼等は恩愛の父母を捨てねばならぬか、何が故に泣いて止むる妻や子を捨てねばならぬか。個人には世界にも易ふる能はず、

一家の團欒にも易ふる能はざるものがある

からである。止つて世にあれば、富貴を得權勢を得、以て一生を安らかに過せるに拘らず、一度我の中に偉大なる或物を自覺する時には、人間社會の有りと有ゆる樂を犠牲に供して、斷然己が望む所に進むのである。それであるから、新聞などに能く出る自殺者が、譯の分らぬ所に仕方なく〱引かれて行く樣な心持で、事を爲すとは餘程違ふ。

一方はどうかして此世に居たい、生きて居たいと思ふが、色々の事情の爲にそれが出來ず煩ねて泣いて恨んで死ぬのだが、他方は自思ひ立つて天地に悠々自適せんとするのである。而して人間の中には、誰しも自然を友として生きたいと云ふ深い望がある。私は嘗つて斯う云ふことを讀んだ。小説であつたか、事實であつたか分らぬが、時はいつか分からぬが、夏ならば裏の背戸には小川につゝいた樋でもかゝつて居らうと云ふ百姓家に、どうしたはづみか立派な服裝をした二人の子供が遊びに來た。そして二人は何が面白くてか、歸る事も

忘れて終日遊び暮らした。すると二人を探し廻つて居た五六十人の者が、之を見つけて驚いて携れ歸へつた。此二人の子供と云ふのは王の御子であつたのである。玉を炊ぎ桂を焚く身の、望として得られざるなく、願として適へられぬものもないが、唯一つ金殿玉樓の中に於て得られないものがある。それは何であるかと云ふと、申す迄もなく野の生活である。そこで王子達も幾十人の人に侍つかるゝ事を善ばずして、却つて賤が伏家を慕つたのであらう。段々暑くなつて房州の海や逗子、葉山、或は伊香保、熱海と山に川に遊んで、草葉の露しげき中を分け上りて思を澄すものもあれば、長汀曲浦の旅の路に、漁歌櫓聲を伴侶とするものもある。けれども其宿所はよしや別莊であつても、到底都の比ではない。然るにも拘らず、そよ〱と水面を渡る涼風に吹かれ乍ら、水泳などをする時は何とも云へない樂しい心地になる。婦人なども常ならば、白粉をつけ紅をつけて色々苦心するが、こんな時には黑くなつて妙な帽子を被り乍ら一向平氣である。否化粧に浮身をやつす時よりも袖に宿つた磯の香の方が忘れられないと云ふ。か斯人の中には自然の風物に接せずしては止む事の出來ないものがある。此自然の中からは種々の物が現はれるが、其一例として美に就て云つて見ると、美は人が作る樣に見ねるが、其實は寧ろ天然にある。古來美を研究した者は色

々あつて、或人には天然の美を以て利用の爲と解釋する。例へば花の美しいのは蜂や蝶などの眼を引く爲であると云ふ。けれども自然の美は果してそれ丈で説明し盡さるゝか、夕日が今大空に沈まうとするときに漾々として金を溶すオレンジとなり、紫となり、更に又薄紅となつて次第に移り行くあの景色は何と説明しやう。あれが果して利用の爲であらうか。左樣じやない、天然その物が美を好むからだ。進化論を讀んで見ると細胞の中にさへ驚く可き美があることを記して居るが、これは又何の爲であるか、恐く理窟では分らぬ。そこは何等か自然の表現と見る可きである。小さな子供が山河の美に見惚れて、御母樣何と云ふまあ奇麗なんでしやう、あれはきつと神樣が後に居らしやるからでしやうと云つたさうだがこれは

自然の兒が自然を直觀した

と云ふ可きである。而して又學者は醜は次第に減じて美は日に盛し増加すると云ふ、謂はゞ美の進化を説いて居る。果してその通りとするならば、そこには一種の靈を感せざるを得ない。即ち天然の美に觸れ美に接したる時には、靈を以て靈に交はる妙境奇趣が油然として湧き出づるのである。であるから自然の美を歌ふた詩人にして、我が中に崇高なる思想

の存する事を認めないものはなかつた。人は歴山王やシャーレマン、乃至は秀吉等を以て、其時代を支配したと考へるが深く當時の裏面を探ぐると必ずしも左樣ではない。嘗つてパスカルがクレオパトラの鼻が五六分長いか短かつだなら、世界の歴史は如何に變つたであらう、と云つた事があるが、實に面白い言葉だ。試に思へ若しシーザーにして彼女の美に溺れざりしならば、埃及は彼女の所有ではあるまい。又アントニーにして荒亡流連戰期を過る事がなかつたならば、オーガスタスをして徒らに名を成さしむ事もなかつたであうらに、攻城野戰嚇々の功も翠帳深く鎖せる黑き髪に蔽はれて光なく節を七丘市に引く者をして今猶テームス河岸斷腸の思に堪へざらしむると云ふ。これは美が比較的善くない方面に用ゐられたもので、畢竟美の鑑賞を過つたものである。心が貴く且つ正しいならば、美の世界に貢献する所は實に偉いものである。支那印度其他國に依つて色々の方面から美的趣味が養はれたが、殊に全歐を動したる聖母マリヤとクリストの美とは特筆せなければならぬ。マリヤがラフアエルの筆に上つて現はした氣高き面影は見る者をして何となく美るはしき感を起さする。又神人基督が塵も止めぬガリラヤの湖畔に綠滴る山を負ふて道を説き給へるその姿は後の騷人畫家をして嘆仰禁ずる能はざらしめた所である。彼の母と此兒と、何れも自然

の兒であつて、何等外形の飾はないが、眼の涼しい口元のしまつた自からなる麗質と、房々と垂れた髪の毛は、人をして恍惚たらしめずには置かぬけれども美しいと云ふ中にも何となく嚴かな所があつて、親しむ事は出來やうが狎るゝ事を許さない樣に思はれる。それは何故か人の美でなくて、自然の美であるからである。而して赤子の美は稍之に近いものがある。あの丸々と赤く肥つた中には實に何とも云へない所がある。あの美を更に磨いて行けば、立派なものが出來るに違ひない。漫りに人工を以て神の光を掩はんとするものには、眞の美の現はるゝ筈はない、然らば如何なる精神を以て神に通ずる事が出來るか、と云ふと幼心が必要である。心を澄し念を清くして神に近き奉らんとする時に、心と心、靈と靈とは相觸れ相接して、至妙の樂境に入る事が出來る。私が歐洲に行つて人工の美を盡せる宮殿寺院や坦々たる煉瓦の大道をのみ見た時に自分は。之に飽いた。而して藁家や野の草が見たくて〳〵堪らなくなつた事がある。あれは恐く多くの人の經驗する事と見ゐて自分が如斯感ずる前内田大使をウキーンに訪ねた。其時同君は毎日〳〵宮殿ばかり見て居るのは實に苦痛だそれよりは寧日本に歸つて藁家に住つて見たい。よしそれは小くとも周圍には草もある花もある天然は自分の前に展開する、日本人は何と幸福じやないかと云つて與れたが、後に至つて思ひ合せる所があつた。要するに我々は美を通して神を見る事を知らなければならない。聖書の中に神の宮居に入るには、美の門があると云つてあるが、詩より神に行き、神より詩に行く一面は尊き實驗である。これから避暑や旅行に御出掛けなさるにつけても、自然に接する事、やがて神の御業に接するなりと思ふて、隨所に豐なる惠を受けられん事を祈るのである。

無冠の女王

◎米國の無冠の女王と歌はれたフランシス・ウヰーラード孃は、少時より其志操に於て偉い所があつた。十歳になつた時彼女は、自分は或事をなさん、それが出來る、又しなければならぬ、といふ決心を懷いて居つた。十八歳で學校を卒業する前、余は自分で自分の生活を支持し、また世界に用あるものとならん。自分が此世界に生活して居つたといふ事で、此の世界は如何程にても良くならねばならぬと、其日記中にかきしるした。

◎彼女は未だ廿歳ならぬ中に自分の運命を豫言し、而して四十歳に達せぬ中已に此豫言を實行したのである。若い中に樹てた其の決心、確固たる目的、及び其不拔の信仰は決して搖がされ抑へらるゝことがなかつた。彼女は決して反對に遇ふてたぢろいだり、犧牲心を弛めたり、又信仰を弱めなかつた。彼女は婦人にして其の正直に確信するものの爲には敢て死をも辭せずとの覺悟あるでなければ生存するの價値ある人にあらずと信じて居つた。彼の生活は實に此信念の實現であつた。

◎彼女は斯る決心を以て、纖弱い婦人の身を挺して社會矯風の事業に從事した。或はいに或は筆に依りて人類向上のために全心全力を擧げて盡したのである。殊に彼女は禁酒事業に於て最も僑先である。彼女は早く禁酒の良風を有する家庭に育つたのである。彼女の家庭にある者は下婢下男に至るまで禁酒の誓約をしなければならなかつた。斯る家庭に長じた少女に斯の如き生涯ある決して怪むに足らぬのである。

雜録

子供と金錢

某夫人

女の子は生長すれば、何れも一家の主婦となり、家政をとる運命を荷ふて居るものですから、それには幼少の折から、金錢に對する正當なる觀念を持たせておきたいと思ひます。尤も大人のする樣に買物の巧拙損得といふとまで細かに敎へるとは、一寸六かしく又必要もないかも知れませんけれど、しかし子供には子供相應の機會もありますから、杓子定規にならない限りは、能く之を敎ふるとも出來ませふと思ひます。近來は何人でも一家の經濟をとるには、大體の豫算を立てますが、あれは金錢の濫費を防ぐ許でなく、思慮ある遣方をするといふことが目的であると思ひます。金錢を遣ふといふとは日常生活の一の大なる事柄でありますから、是には充分な思慮を以て行ふとが肝心なると、丁度他の大事を爲すに當り深い思慮を要するとと同然ではありませんか。それで金錢を遣ふといふとは、只金錢を經濟的に上手に遣ふといふ許、即ち金錢上の目的其自身許でなく、もつと深い意味、それ以上の目的があるのであります。それは即ち思慮、精確、注意、秩序等の性格を陶冶するとであると思ひます。それで私は子供に對しても此の見地から小遣錢をやつて居るので御座います。

一番上の娘は今年高等女學校の一年に入りましたが、之には月額五拾錢、次女は尋常三年ですが月額三拾錢、三女はやつと小學校に出た許りですけれど矢張十錢宛やつて居ります。勿論之れは各自の臨時費にする爲で、學校用品の如きは大抵家から具へてやつて居りますから、自分で求めるといふ品は極く少う御座います。それで子供等は毎日曜の日曜學校獻金の如きも、此中から各自の考次第する樣に致して居ります。獻金と申しても、母の手から先生の手へ只御取次をした許では、敎育上の効果が少ないと思ひます矢張自分の御金の中から、神樣の御用のため獻げるといふ所に、感謝の念が深くおこると思ふのであります。で臨時費はそう多いものではありませんから、是れ許の小遣でも殘餘が出來ますと、毎月之れを貯金させる樣に致して居ります。そして何か多額の臨時費が要るといふ時には、又之を費はせるのです。御友達や學校の先生など御招待申した時は、三人の子供が各自の御金を出し合つて、御菓子など買ふとにしてあります。

救世軍で克己週間がある時など、子供の例月の小遣の中から許りださせるのも如何ですから、此週間は、子供等に定めてある毎日の家庭の仕事を立派にやつた人には二錢、自分の定まつた仕事以外によい仕事を一つした人には更に二錢を増してやり、一週の終末に之を集め、尙いく

らか足して救世軍に寄附致させました。小さい子はまだ克己週間などの意味もよく分りませんので、毎晩其事をよくいひきかせましたが、此の週間中は何かを捉へても、克己週間をもちだすので飛んだ御愛嬌でありました。それで只御金を寄附して慈善心を養はせる許でなく、又たゞ消極的に克己をやらせる許でなく、積極的に自分で働き、自分で取る金のいかに尊いかも知らせたいと思ふので、それには克己週間などは極くよい機會だと信じて居ります。

子供等はそれ相應な小遣帳をつけさせております。女學校のは追々家政でも學ぶ樣になれば、段々工夫した細い帳簿も出來ませふと思ひますが、今はたゞ出入の大まかな附方を致させておきます。

女學生と誘惑

近頃政治界及實業界に於ける陏落の眞相暴露らせれてから、腐敗の波動は社會のあらゆる部分にも及べるが如く思はれて、いたく悲痛の情に打たるゝ次第である。吾人は最近の丁酉倫理會倫理講演集中に無名氏の「誘惑」と題する條を讀み、慨然として恐れ戰いた。破廉耻無節操なる青年が如何にあさましき陏落の淵に陷りつゝあるか、而して又彼れの手によりて小羊の如く無垢なる處女が暗坑に導かれんとしつゝあるか。吾人は日々の新聞紙上に於て此種の出來事の結果を散見しない譯ではないが、今其詳細なる記載を見て、彼れの毒手のあまりにあさましきを思ひ、左に其大體を轉載して父兄及女學生諸君の一覽を求めたいと思ふのである。

自分は三ケ月程前に田舍の親族から娘を預かつた。或る日さる新聞に下のやうな意味の記事があつた。其新聞の記者が妹を連れて或る所の活動寫眞を見に行つた。すると角帽を被つた一人の學生が頻りと其妹の方に近寄つて來た。そこで記者はわざ〳〵其學生の足を踏んでやつた其翌朝になると妹は只今着物を疊んだら袂から斯樣なものが出たと云つて一手紙を記者に示した。そこで記者はそれを開封して見ると猥らしい文字を並べた艶書で、其結末には是非返事をくれよと云ふて封筒には麗々と下宿の名を書いてある記者は一つには非常に憤り又一つには抑へ難い好奇心から一つ其學生を窘めてやらうと云ふ考を起した。由つて其下宿を訪ねてかく〳〵の者は下宿して居るかと尋ねた所が、左樣な方は居らんと云ふ事であつた。此れでは手紙に依る外はないと思ふて、宅に歸つて女文字の麗はしく眞心込めた、水莖の跡に、何日何時頃神田の東明館の前で面會したいと云ふ意味を述べたそして約束した其時刻に記者はわざ〳〵東明館の前に行つて見ると、案の如く、左を見、右を見、人待ち顏の一人の學生を認めた。恐らくあれだと思ふたが、間違つてはと考へなほして、程經て復行つて見ると、前の如く待ちぼけて居つたそこでづか〳〵と其前に行つて不意に大喝した所が、先方では覺つたか覺らぬかは知らないが間もなく悄然として立ち去つた。自分は一通り此記事を讀んで實際斯樣な事があるものであらうか。若し果してあるとされすば、世の年頃の娘を持つ父母、年頃の妹を持つ兄姉、年頃の女學生を教育する教師は餘程警戒を加へんければならないと今更ながら思ふことである それから二三日經て、親族の娘が學

校から歸つて來て包みを解くや否や、直ぐに今日は實にいやな事がありましたと云ふ冒頭で下の様な事を物語つた。

今日十時頃に事務所から私を呼びにまゐりましたから事務所に行つてみますといふと、事務員が申しますには、貴方にはお兄様がありますか。今朝本校の女教師の一人が日比谷公園の門前に通りかゝると後から大そう急いで一人の學生が追ひかけて參つた、誠に申兼ねますが、貴方は某女學校にお出のお方の様に御見受け致しますが、手前には某と申て貴方の學校に御厄介になつておるものゝ兄でございます。今朝妹に云ふ事を忘れて云はずに仕舞いましたから、どうか此手紙を御渡し下さいといふ事でありました。そこで教師の人は學校も程近い事でありますれば、御自分でいらつしやつて妹御に御面會なされた方が可いでせうと云ふと學生は、いや實は自身會ひたいのでありますが、これから急いで圖書館に參らねばなりませんから、どうぞ恐縮ですが之をお渡し下さいと云つて强ひて貴方と同姓名宛の手紙を渡して行つて仕舞つたさうです其手紙は此の通り此處にあるのですが果して貴方のお兄様は左様な事を致されますかと。そこで娘は、私には兄はありますが、一緒に住んでおりませず、從つて左様な事は決して致すわけはありません、只今牛込の方に居ますので、と云ひました。事務員は此方でも十分怪しいものと思つて失禮とは存じましたが開封して見たのであります。表は立派な絹のハンカチーフで包で、それをピンで止めて、其上叮嚀にも西洋紙の封留で封じてありました。中を見ると若い婦人の方にはお見せすることも、亦話しする事も出來ない様な文字が書いてあります。然し御覧になりたければお見せしないでもありませんがと云はれました。そこで、私は無論拝見しませんでよいと申しました。すると世間には斯様な惡戯者がある以上は、今後注意に注意して戴きたいと云はれました。

今や自分は二三日以前の新聞の記事の事實を眼前に見る心地して云ふに云はれない不快の感に打たれた。して見れば彼の記述も無論事實であらう、實に危險千萬であつて年頃の女子の父母兄姉乃至教師は實に骨の折れるものである。かような場合には如何なる方法を取るのが安全であるかに就ては直ちには善い考も付かないで、只娘に今後呉れ〲も注意するやうに申し聞かせた丈であつた。

それから大凡二週間も過ぎてから、娘が學校から歸つて來て、勢込んで、今日は校長さんが生徒一同を大講堂に集めて下の様な事を御話しになりました。先日の事は人違であつてほんとうに私はセイ〲しました。校長さんは嚴格な態度で云はれましたには

皆さん、本校に某といふ學生があります（其の學生の姓は親族の娘のと同じである）。少し此學生に就て怪しい事のあります様な事を聞き込みました爲めに篤と聞き正しましたが、下の様な事を自白しました。ある日其學生が淺草の電氣館に這入つて見物して居ると一人の學生らしい人が參つて、某さん御久しぶりですね。私は貴方のお兄様の友人の某でありますが、當時學校は何方でありますかと、突然聞かれました。突然男子から話しかけられたのであるから一時は驚きもしたが能く見ると如何にも兄の友達らしい人で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ありますから、學校は某學校ですと答へてしまいました。其時はそれで別れたのでありますが、それから少し過ぎましてから、某の姓だけの宛名の手紙が郵便で屆きました。本校内には同姓の者が多い爲め、諸方聞かせました處が、某は差出人の名を見、これは私の處へですと申して受取ました。其後本校の門前をぶらついて居る一人の學生を事務員が認めました。すると或日其學生が事務室に參つて私は御校に御厄介になつております某の兄でありますが、今日其者は居りますかと聞きました。そこで事務員は濫りに來訪者に生徒の面會を許さないのみならず、單に姓丈けでは分らない旨を告げました。すると學生は其れきり歸りましたが、其時本校の生徒の名札を讀みまして某の名まで知つたものと見ゑまして先日本校の敎師の某さんが日比谷公園の門前に來かゝりますと、一人の學生が私は御校の某の兄でございますが、何卒之を某に渡して下さいと申しまして、無理に—の手紙を賴まれました。そこで私が某を呼んで能く聞き正しましたが、前申しました事實を答へたのであります。某は左迄怪しい事はありませんやうです。只人の目に立つ樣な身成りをして居ました爲めに電氣館で惡書生の注意を惹いて、遂に手紙をつけられる樣な事になつたのであります。其手紙は詳しく御聞かせ申す必要もないのでありますが、御注意の爲めにかいつまんで申しまれば、私の父は宮内省の高官であつて、私は富貴の家に育つたものであります。父は如何にも嚴格な性で夜分など私の外出を許しませんが晝は何だかきまりが惡くて御會ひ申すことが出來ませんから、何日何時頃淺草の電氣館入口に御出でを願ひたい、貴方の御名は私の妹の名と同じであります。妹は當今學習院の女子部に參つております爲に一層おなつかしいのであります當日は是非に御出を願ひますと云ふ樣な意味であります。斯樣に東京では皆さんに取つて恐ろしい誘惑があるのでありますれば學校の方でも勿論注意は致しまするか皆さんもくれ〳〵も注意して戴きたいのでありますと…云々(以下轉載)

讀み來り讀み去り吾等は斯くの如く恐ろしき誘惑が現に女學生諸君を襲はんとしつゝあるを見て戰慄せざるを得ない者である。斯くの如き痴愚なる怯儒なる破廉恥なる誘惑者が數に於ては甚だ僅少なものであつて從つて其誘惑を試みる範圍も狹少であるにしろ、山羊の一匹でも之によつて失はれたならば、爲に惹起さるゝ社會の影響は決して喜ばしいものではない、隨落し行く者の運命は悲慘であるしかも此世に純潔無垢の處女がみす〳〵破滅の深淵に陷ち行く程悲慘なものはあるまい。汚泥に染まぬ蓮華一株未だ開かざるに既に早く慘風に打れ悲雨に摧かる。實に之れ限りなき悲痛である。吾等は玆に世の父兄姉敎師たる人々に對し女學生諸君の身に深甚にして懇篤なる注意を拂はれん事を要求してやまない者である。靑年男女の交際に於て、小說雜誌の選擇に於て、或は又公共團體の集會に於ては學校及家庭の監督者は女子の人格を沒する程度にまで其注意を拂つたやうな觀があつた。吾等と雖も從來女學生の上に施されたる監督法を以て誤れるものとなすものではない、寧ろ其苦心を諒とするものである。けれど誘惑は必ずしも豫期した邊に顯はれ來るものではない淺草の電氣館と神田の東明館に於てのみ行

はるゝものでない、學校より家庭の歸途に表はるゝのみでない。メフイストフエレネの巧なる誘惑は嚴格なる哲學者の心を其圖書室裡に於て亂して仕舞つたのである。父兄教師監督者の目の屆かぬ處に於て惡魔の手がかゝつたら如何であらうと、他の制御によつてのみ自己の品性の純潔を持續し得る樣にならされた女學生諸君の運命は實に風前の燈火と同樣ではあるまいか。是に於て吾等は切言せざるを得ない。女學生諸君をして各自身を護らしめよと、最終の責任者は「我」である。世界廣しと雖も自己を措いて他に自己を救濟し得る者はない。自己を救濟し自己を守護するには堅州にして不屈不撓なる精神と高潔なる見識を要する。混濁せる二十世紀の文明に生存せる婦人は從順と溫良の美德を把持するのみにては未だ充分でない。今や惡魔は益々其爪牙を鋭くして好餌を求めつゝあるに、而も一方世界の趨勢は婦女をして單獨に世路の街頭に立しめんとしておるのである。何時迄か監督者の援助を求めてゐられよう。自ら助けねばならぬ、自ら選ばねばならぬ。自ら救はねばならぬ。吾等は婦人前途の運命を想うて一面寒心すると同時に亦一面女子覺醒の機の這般に伏在するを見て大に意を强うする者である。

（一記者）

編輯だより

◎近年稀有なる大暑で御座いますが、讀者諸君は今日正に海に山に凉風を友として居らるゝことゝ思ひます。本號も夏期號として襖も障子もあけ放ちさり擴げたる体裁に致しました次號よりは各欄を舊に復して益々實益と興味に富む文字を增さんと考へて居ります

◎本誌への投書は本月十日限小石川小日向臺町九三新人社事務所へ御送りを願ひます。讀者諸君の夏季中に於ける感想實驗談等は喜んで歡迎致します

◎酷暑の候謹て讀者諸君の健康を祈る

新刊紹介

◎小兒●●●●救急 母の手引　醫學博士柳瀨實次郎著　定價九拾錢　丸善書店發行

小兒の病氣負傷等一切の事柄を擧げ一々簡單なる應救治療法を述べしもの、加ふるに育見法の一端を以てせり。世の家庭には無くて叶はぬ一書なり。製本訂裝亦麗矣。

本誌定價　一部金拾錢（郵税ナシ）◎六部半年分前金六十錢（郵税ナシ）◎壹ケ年分十二部前金壹圓拾錢（郵税ナシ）

外國行定價　壹部金拾四錢（郵税ナシ）◎半年分前金八拾錢（郵税ナシ）一ケ年分前金壹圓六拾錢（郵税ナシ）

廣告料	
廿七字詰一行	金廿五錢
四分ノ一頁	金三圓
半頁	金五圓
一頁	金十圓
內表紙十二圓	外表紙拾八圓

●數回引續き御掲載の向へは大割引可致候

●本誌代金は總て前金に御拂込み被下度候

●郵券代用は一割增の計算て御送附被下度候

通信、爲換、寄贈雜誌等は必ず左の宛に願上候

東京市小石川區小日向臺町三丁目九十二番地

新人社事務所

振替貯金口座一四〇〇五

明治四十二年七月二十八日印刷
明治四十二年八月　一　日發行

發行兼編輯人　東京市小石川區材町四十三番地　海老名彈正
印刷人　東京府下豐島郡巣鴨村大字巣鴨六百六十一番地　野口末彥
發行所　新人社
印刷所　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　齋藤活版所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

院長診察月、水、木、金、午前、松田醫學士診察火、土、
午前、窮者施診火、木、午前、入院診斷後隨時應需、
松田、林、兩副長は目下當院に在勤、

電話本局（八八八病院用 八九八私宅用）

東洋内科醫院

東京市神田區駿河臺鈴木町二一番地（御茶水橋畔）

院長　醫學士　高田畊安

神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎村濱（停車場所在）

電話茅ヶ崎（二一番）

南湖院

河野副長は目下當院に在勤、
院長診察土曜日午後○同時窮者施診、
副長診察月、火、水、木、金、土、午前
入院診斷後隨時應需、

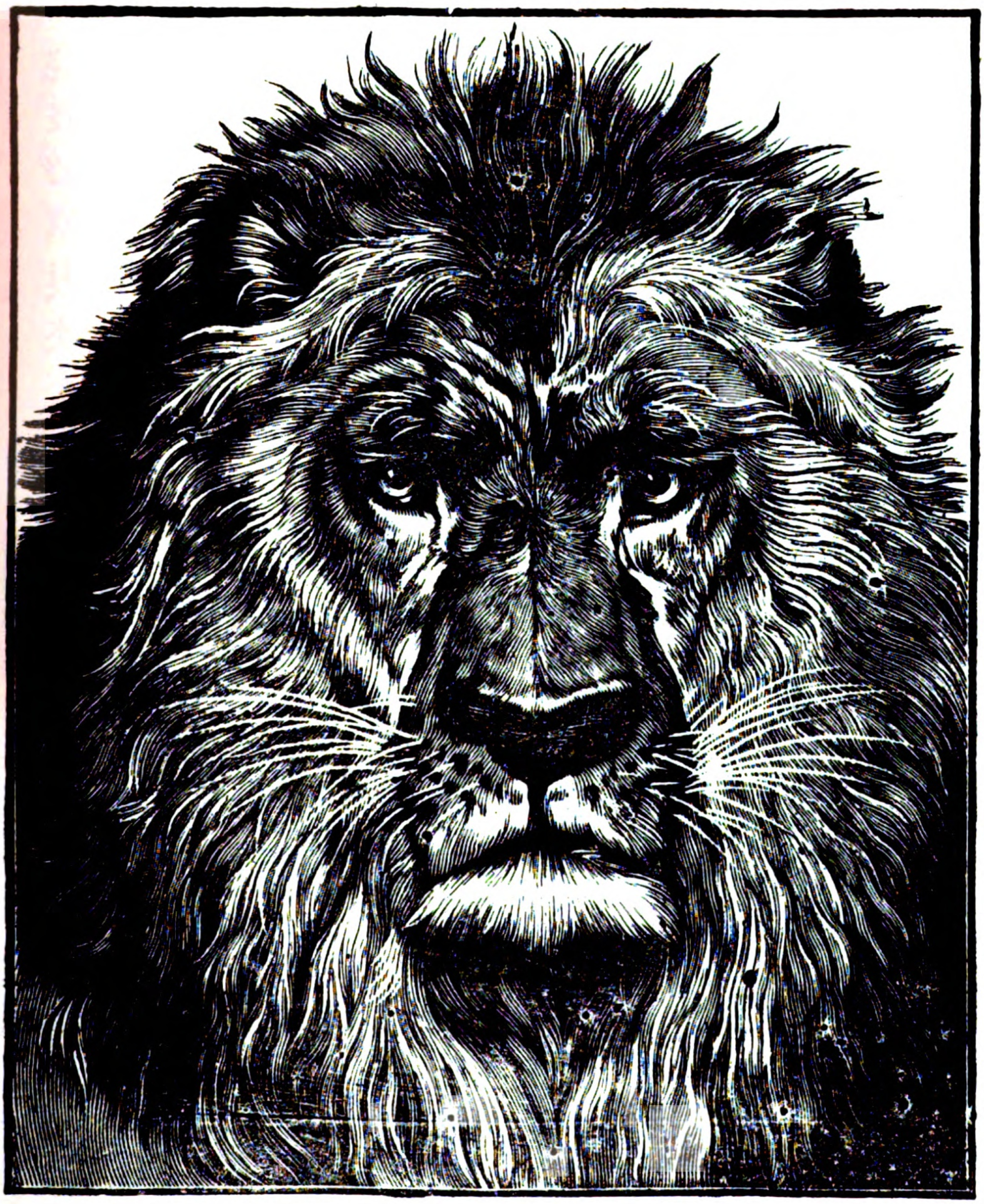
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新女界

明治四十二年三月廿九日第三種郵便物認可

毎月一回一日發行

ライオン歯磨



發賣元

東京市神田柳原川岸

小林富次郎

明治四十二年八月一日發行第壹卷第五號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN